# オクタウィウス

ミヌキウス・フェリクス

藤遥　制作

# 1〜4章　オスティアの浜辺

1:1 よき人であり、このうえなく誠実な友であったオクタウィウスのことを、わたしは思い、心の中でその思い出をたどった。すると、あの人へのいとしさと慕わしさが、あまりに深く胸にしみついた。そのため、わたしには、自分がいわば過去へ帰っていくように思えた。すでに過ぎ去り、終わってしまったことを、記憶によって呼び戻すのとは違っていた。1:2 こうして、あの人の姿は、目から取り去られた分だけ、わたしの胸に、そしてほとんど心の奥底にまで、織り込まれたのである。1:3 このすぐれた、聖なる人は、世を去るとき[1]、わたしに、あの人を慕う計り知れない思いを残していった。それも、もっともなことだった。あの人自身も、いつもわたしへの愛に燃えていたからだ。その愛のゆえに、遊びのときもまじめなときも、あの人はわたしと思いを一つにした。同じことを望み、同じことを望まないところまで、心が合っていたのだ。一つの心が二人に分けられたのだと思えたほどである。1:4 こうして、愛のことでは、あの人だけがわたしの打ち明け相手であり、迷いの中では、あの人自身も道連れだった。やがて霧が払われ、わたしは暗闇の深みから、知恵と真理の光の中へ浮かび上がった。そのときも、あの人は道連れのわたしを拒まなかった。いや、もっと誉れあることに、わたしより先に走っていた。1:5 そこで、わたしは、わたしたちが共に暮らし、親しく交わった歳月のすべてを思いめぐらした。そのとき、わたしの心がとりわけとどまったのは、あの人のある語らいだった。カエキリウスは、迷信のむなしい教えにまだしがみついていた。その彼を、あの人がきわめて重みのある論じ合いによって、まことの宗教へと改めさせた語らいである。

2:1 というのも、オクタウィウスは、用事のためと、わたしを訪ねるために、ローマへ急いでやって来ていたのだ。家も、妻も、子供たちも置いてきていた。子供たちはまだ罪を知らない年ごろで、半ばしか言葉にならない語を口にしようとしていた。それこそ子供のいちばん愛らしいところで、その片言は、つかえる舌がとぎれるからこそ、いっそうかわいらしかった。2:2 あの人が来たとき、わたしがどれほど大きな、抑えきれない喜びに躍り上がったかは、言葉では言い表せない。親友が思いがけずそこにいることが、わたしの喜びをこのうえなく大きくしたのだ。2:3 こうして一日二日が過ぎた。いつも一緒にいたので、会いたいという渇きもすでに満たされた。離れていたあいだに互いに知らなかったことも、かわるがわる話して知り合った。そこで、とても美しい町オスティアへ行くことにした。海で水を浴びることが、わたしのからだの湿りを乾かすのに、心地よくふさわしい養生になるからだった。それに、ぶどうの取り入れのための休みが、法廷の務めをゆるめてくれていた。というのも、その時期は、夏の暑さが過ぎ、秋が穏やかな気候へと向かっていたからだ。2:4 そこで、ある夜明けに、わたしたちは浜辺をそぞろ歩きながら海へ向かっていた。吹き寄せるそよ風に、手足をやさしく元気づけてもらうためだった。また、砂が柔らかな足取りに沈み込むのを、このうえなく心地よく味わうためでもあった。そのとき、カエキリウスはセラピスの像に目をとめた。そして、迷信深い民衆がよくするように、手を口もとに寄せ、唇でその手に口づけした。

3:1 すると、オクタウィウスが言った。「兄弟マルクス、この人は、家でも外でもあなたのそばを離れない人です。その人を、このように無知な民衆の盲目の中に見捨てておくのは、善い人のすることではありません。こんなに明るい日に、この人が石にぶつかるのを放っておくのですから。たしかに、形を刻まれ、油を塗られ、花の冠をかぶせられた石ではありますが。この迷いの恥は、本人に劣らず、あなたにもはね返ってくることを、あなたも知っているでしょうに」3:2 あの人がこう話すうちに、わたしたちは町の中ほどを通り抜け、もう開けた浜辺に出ていた。3:3 そこでは、穏やかな波が、浜の端の砂を洗いながら広がっていて、まるで散歩道を平らにならしているかのようだった。海というものは、風がやんでもいつも静まることがない。その日の海は、白く泡立つ大波となって陸に押し寄せはしなかった。それでも、その場でさざ波が縮れ、うねりながらさまよ

う様子に、わたしたちはすっかり楽しくなった。わたしたちが海の水ぎわで足の裏を浸していると、波がかわるがわる寄せては引いたからだ。その波は、寄せて来ては足もとにたわむれ、引き返しては来た跡をたどり、また自分の中へ吸い込まれていった。3:4 こうして、わたしたちはゆっくりと静かに進み、ゆるやかに弧を描く浜辺に沿って歩いた。道のりは、話をしているうちに知らず知らず過ぎていった。その話とは、航海について語るオクタウィウスの物語だった。3:5 話しながら十分な道のりを歩いたところで、わたしたちは向きを変え、歩いて来たのと同じ道をまた踏んで戻った。そして、小舟が陸に引き上げられ、地面で朽ちないよう、下に敷いた材木の上に浮かせて休めてある所まで来た。すると、子供たちが競い合ってはしゃぎながら、海へ貝殻を投げて遊んでいるのが見えた。3:6 その遊びはこうである。波にもまれてなめらかに丸くなった貝殻を、浜から拾う。その貝殻を平らに寝かせて指でつまみ、自分も身をかがめ、できるだけ低くして、波の上へ回しながら投げる。投げたものは、穏やかな勢いで滑っていくときには、海の背をかすめる。何度も跳ねて浮き上がるときには、波の頭をかすりながら飛び出していく。子供たちの中では、自分の貝殻がいちばん遠くまで進み、いちばん多く跳ねた者が、勝ちを誇るのだった。

4:1 こうして、みながこの眺めの楽しさに心を奪われていた。ところが、カエキリウスは何にも気を向けず、子供たちの競い合いを見て笑いもしなかった。黙りこみ、思い悩み、一人離れて、何かに心を痛めていることを顔に出していた。4:2 そこで、わたしは彼に言った。「これはどうしたことか。カエキリウス、君のいつもの快活さが見えないのはなぜだろうか。まじめな話のときでさえ目に浮かんでいた、あの明るさも見当たらない」4:3 すると彼は言った。「さっきから、わたしたちのオクタウィウスの言葉が、わたしをひどく苦しめ、ちくちくと責めているのだ。彼は君に食ってかかって、怠慢を叱った。だがそれは、それとなく、もっと重く、わたしの無知をとがめるためだった」4:4 「だから、わたしはもっと先へ進もう。この件は、もう何から何まで、わたしとオクタウィウスとのあいだのことだ。よければ、わたしは、彼に攻められた当の一派の人間として、彼と論じ合おう。そうすれば、仲間うちで議論するほうが、知恵をもって渡り合うよりもたやすいことが、彼にもきっとすぐにわかるだろう」4:5 「さあ、浴場を守るために投げ入れられ、沖へ突き出している、あの岩の防波堤に腰を下ろそう。そうすれば、歩き疲れも休められるし、もっと身を入れて論じ合うこともできる」4:6 彼がそう言うとすぐに、わたしたちは腰を下ろした。二人は、三人のうち真ん中のわたしを、両脇から囲んで守る形になった。これは序列や名誉への敬意からではなかった。友情は、いつも対等な者を受け入れるか、対等な者にするかのどちらかだからだ。そうではなく、わたしが審判として、二人のどちらにもいちばん近くにいて耳を傾け、論じ合う二人を真ん中で隔てるためだった。

## 訳注

1 写本の語は『去る』で、死ではなく別れと取る説もある。

# 5〜8章　カエキリウスの演説（一）

5:1 それから、カエキリウスはこう話し始めた。兄弟マルクス、いまわたしたちがまさに問うていることは、君にとっては、もう迷うまでもないことだろう。君は二つの生き方のどちらにも念入りに身を置いたうえで、一方を退け、もう一方を受け入れたのだから。それでも、いまこのときは、心をこう整えてもらわなければならない。いちばん公正な裁き手の秤を手に持ち、どちらの側にも傾いて寄りかからないように、と。判定が、わたしたちの論じ合いから生まれたというより、君自身の考えから持ち出されたものに見えないようにするためだ。5:2 それなら、君が、いわば初めて聞く者、どちらの側も知らない者として、わたしのために席に着くなら、明らかにするのはたやすい。人間の事柄はすべて疑わしく、不確かで、宙に浮いている。すべては、真実であるより、真実らしいだけなのだ。5:3 それだけに、ある人々が手当たりしだいの意見に軽々しく屈しても、それほど驚くにはあたらない。真理を奥底まで探る面倒に嫌気がさして、粘り強く念入りに探り続けるほうを選ばないのだ。5:4 だから、これはだれもが憤り、胸を痛めるべきことだ。ある者たちが、万物の根本と神の威光について、あえて何か確かなことを言い切ろうとしているのだ。しかも、学問を知らず、文字に縁がなく、卑しい手仕事の技さえ身につけていない者たちがである。哲学そのものが、あれほど多くの学派に分かれ、あらゆる時代を通じて、そのことをいまもなお思案し続けているというのに。5:5 それも無理はない。人間の小さな力は、神のことを探るには、あまりに遠く隔たっているからだ。わたしたちの上で天に掛けられ、高く上げられているものがある。地の下に深く沈められているものもある。そのどちらも、知ることは与えられず、探ることは許されず、推し量ることさえ畏れ多いほどなのだ。また、あの昔の賢者の神託は、自分自身を知れと言う。それに従って自分をもっとよく知るなら、それで十分に幸いで、十分に賢いと見られて当然なのだ。5:6 しかし、わたしたちは狂った、愚かな骨折りにふけって、自分の低さの境を越えてさまよい出ている。地に投げ出された身でありながら、大胆な欲に駆られて、天そのものも、星々そのものも越えようとしている。そうであるなら、せめてこの迷いを、むなしく恐ろしい思い込みでもつれさせないようにしよう。5:7 初めに、自然がおのずと寄り集まって、万物の種が固まったのだとしよう。それなら、ここでどんな神が造り主だというのか。全世界の部分が、偶然のぶつかり合いによって結びつき、並べられ、形づくられたのだとしよう。それなら、どんな神が工匠だというのか。星々は火がともしたのだとしてよい。天は、それ自身の素材が掛けたのだとしてよい。大地は、それ自身の素材がその重みで据え、海は、水が流れ集まってできたのだとしてよい。それなら、この宗教はどこから来るのか。この恐れはどこから来るのか。何の迷信があるというのか。5:8 人間も、生まれ、息を吹き込まれ、育っていくあらゆる生き物も、いわば元素がひとりでに寄り集まったものだ。人間もあらゆる生き物も、ふたたびその元素へと分かれ、解け、散っていく。このように、すべては源へ流れ戻り、自分の中へ巡り帰っていく。造り手も、裁き手も、造り主もなしにである。5:9 このように、火の種が集まって、次々と新しい太陽がいつも輝く。同じように、大地から湯気が立ちのぼって、霧がいつも湧いてくる。それが濃くなり固まると、雲となって高く昇る。雲が崩れ落ちると、雨が降り、風が吹き、雹が音を立てる。あるいは雨雲がぶつかり合って、雷がとどろき、稲光が赤く光り、稲妻がひらめく。そういうわけで、稲妻はところかまわず落ちる。山に襲いかかり、木々に突き当たり、聖なる場所も汚れた場所も選ばずに打つ。罪ある人を打つが、信心深い人もしばしば打つのだ。5:10 移り変わる、定めのない嵐のことを、いまさら語る必要があるだろうか。そこでは、あらゆるものの勢いが、秩序もなく、見境もなく、転がり回っている。難破では、善人と悪人の運命が混じり合い、報いもごちゃまぜになるではないか。火事では、罪のない者も罪ある者も、同じ死を迎えるではないか。疫病をもたらす腐れが、ある地方の空を汚すときには、だれもかれも分け隔てなく死に絶えるではないか。戦いの熱が荒れ狂う

ときには、むしろすぐれた者のほうが倒れるではないか。5:11 平和なときでさえ、悪はすぐれた者と同じに扱われるばかりか、敬われもする。そのため、多くの場合、悪人たちの心のゆがみを憎むべきか、その幸運をうらやむべきか、わからないほどだ。5:12 もし世界が、神の摂理と何かの神の権威とで治められているなら、パラリスやディオニュシオスは決して王位を得なかっただろう。ルティリウスやカミルスが追放の身となることも、ソクラテスが毒を飲まされることも、決してなかっただろう。5:13 見よ、実をつける木々が、見よ、もう白く実った麦が、もう酔うほどに熟したぶどうが、雨に損なわれ、雹に打ち倒される。つまり、どちらかなのだ。真理が不確かなまま、わたしたちから隠され、押さえつけられているのか。あるいは、むしろこちらのほうが信じるに足るのだが、運が法則に縛られず、移ろいやすく危うい偶然のままに支配しているのか。

6:1 それゆえ、運は盲目であるか、自然は不確かであるかのどちらかなのだ。それなら、真理の師である先祖の教えを受け継ぐほうが、どれほど尊く、どれほどよいことだろうか。伝えられた宗教を守り、神々を拝むほうがである。その神々は、君がよく知るより先に、恐れるようにと親たちから教え込まれた神々だ。神々について自分で判定を下さず、昔の人々を信じるほうがよいのだ。彼らは、まだ素朴な、世界が生まれたばかりの時代に、神々を情け深い味方としても王としても持つことを勝ち得たのだから。だからこそ、わたしたちは目にするのだ。あらゆる帝国、属州、町々で、それぞれの民が自分たちの祭儀を持ち、土地の神々を拝んでいる。エレウシス人はケレスを、プリュギア人は神々の母を、エピダウロス人はアエスクラピウスを拝む。カルデア人はベルスを、シリア人はアスタルテを、タウリ人はディアナを、ガリア人はメルクリウスを拝む。そしてローマ人は、あらゆる神々を拝むのだ。6:2 ローマ人の力と権威は全世界の周りを占め、その支配は太陽の道を越え、大洋そのものの果てを越えて広がった。それは、次のようにしてだった。彼らは戦いにあっても、神を敬う勇気をふるった。都を、祭儀への敬いと、清らかな乙女たちと、数多くの祭司の位と名とで固めた。包囲され、カピトリウムだけを残してすべて奪われたときにも、神々を拝んだ。ほかの者なら、怒っているとみて、もう見捨てていたはずの神々をである。そして、その迷信の大胆さに驚くガリア人の陣列の中を、武器を持たずに、ただ宗教の勤めで身を固めて進んでいった。敵の城壁を奪い、勝利がまだ猛り狂っているうちに、打ち負かされた神々をあがめた。至るところで客人の神々を探し求めては、自分たちの神とした。ときには、知られない神々や死者の霊のためにさえ、祭壇を築いた。6:3 こうして、あらゆる民の祭儀を受け入れているうちに、彼らは国々の支配までも勝ち得たのだ。ここから、崇敬が絶えることなく続いてきた。その崇敬は、長い年月によって損なわれず、かえって増していく。古さというものは、儀式と社に、積み重ねた年数の分だけ聖さを与えるものだからだ。

7:1 それでも、わたしたちの先祖は、鳥占いを守り、いけにえの内臓に伺いを立て、祭儀を定め、聖所を奉献することに力を尽くした。それは軽はずみなことではなかった。ここはわたしもひとまず譲り、迷うならましなほうへ迷おうと、あえて思うからだ。7:2 書物に残された記録を見てみるがいい。すぐにわかるだろう。先祖たちは、あらゆる宗教の儀式を始めていた。神々の恵みに報いるためか、迫ってくる怒りをそらすためか、すでにふくれ上がって荒れ狂っている怒りをなだめるためだった。7:3 その証人は、イダの母神だ。この女神は、到来によって、ある婦人の貞潔を明らかにし、都を敵への恐れから解き放った。その証人は、騎士の兄弟の像だ。池のほとりに、兄弟が自分の姿を現したとおりに奉納された。兄弟は、泡を吹き湯気を立てる馬に乗り、息を切らして、ペルセウス王に対する勝利を、勝ったその日のうちに知らせたのだ。その証人は、ユピテルが機嫌を損ねたために、平民の男の夢によって競技がやり直されたことだ。デキウス家の人々が身を捧げた誓いも、聞き届けられて、証人となっている。クルティウスもその証人だ。彼は、騎士である自分の身の重みで、あるいはその栄誉によって、深い淵の裂け目を埋めて平らにした。7:4 それどころか、わたしたちが望んだよりも何度も、ないがしろにされた鳥の兆しが、神々がそこにいることを証ししてきた。アッリアが不吉な名となったのも、そのためだ。クラウディウスとユニウスの出陣が、カルタゴ人との戦いではなく、死の難破に終わったのも、そのためだ。トラシメヌス湖がローマ人の血で水かさを増し、色を変えたのは、フラミニウスが鳥占いを軽んじたからだ。クラッススは呪いの言葉を受けるようなふるまいをし、しかもそれをあざ笑った。そのために、わたしたちはパルティア人に軍旗を返せと求めることになったのだ。7:5 昔のことはたくさんあるが、

それは省こう。神々の誕生や、贈り物や、賜物について詩人たちが歌ったことも、かまわずにおこう。神託によって予言された運命も飛ばそう。君たちに、いにしえの話があまりに作り話めいて見えないようにするためだ。神々の神殿や聖所に目を向けるがいい。ローマの都は、それによって守られ、飾られている。それらの神殿は、飾りや、しるしや、捧げ物で豊かであるより、むしろ尊い。そこに住み、そこにいて、そこに宿る神々がいるからだ。7:6だからこそ、神に満たされ、神と混じり合った予言者たちは、未来を先取りして摘み取る。危険には用心を、病には薬を、苦しむ者には望みを、みじめな者には助けを、災いには慰めを、労苦には安らぎを与える。眠っているあいだにさえ、わたしたちは神々を見、その声を聞き、それと知る。昼には、不敬にも否み、拒み、偽って誓うその神々をである。

8:1だから、不死の神々については、その理屈も起こりも不確かではあっても、あらゆる民の考えが揺るがずに一致している。そうである以上、この宗教を崩そうとしたり、弱めようとしたりする者を、わたしはだれ一人許さない。これほど古く、これほど役に立ち、これほど身のためになる宗教をである。そういう者は、それほどの大胆さと、それほど神を恐れぬ何やらの賢さとで、ふくれ上がっているのだ。8:2たとえそれが、キュレネのテオドロスであっても、それより前の、メロスのディアゴラスであってもだ。ディアゴラスには、昔の人々が「無神論者」（アテオス）というあだ名を付けた。この二人はどちらも、神々などいないと言い張って、人の世を治めているあらゆる恐れと崇敬とを、根こそぎ取り去った。それでも、この不敬の教えにおいて、見せかけの哲学の名と権威によって、彼らが力を持つことは決してないだろう。8:3アブデラのプロタゴラスは、神について、冒涜からではなく、思慮深く論じたにすぎなかった。それでも、アテネ人は彼を国境の外へ追い放ち、その書いたものを民会で焼き払った。そうであるなら、人々が、と言おう。君たちは、わたしが引き受けた弁論の勢いを、少し遠慮なくふるうのを許してくれるはずだからだ。そう、見放され、禁じられ、望みを失った一味の人々が、神々に向かって暴れ回っているのを、嘆かずにいられるだろうか。8:4あの連中は、社会のどん底のかすの中から、ものを知らない者たちと、信じやすい女たちを集める。女たちは、女の性のもろさゆえに、たやすく流されるのだ。こうして、不敬な陰謀の徒党を作り上げている。その徒党は、夜の集まりと、定めの断食と、人の食べるものではない食事とによって結ばれている。何かの聖なる儀式によってではなく、罪のけがれによってである。物陰に潜み、光を避ける連中だ。人前では黙りこみ、隅では口数が多い。彼らは神殿を墓のように見下し、神々につばを吐き、祭儀をあざ笑う。自分こそみじめなくせに、こともあろうに祭司たちをあわれむ。栄誉や紫の衣を見下すが、自分たちは半ば裸なのだ。8:5ああ、驚くべき愚かさ、信じがたい大胆さよ！　彼らは目の前の責め苦をさげすむ。そのくせ、不確かな先のことは恐れている。死んだ後に死ぬことは恐れるのに、さしあたって死ぬことは恐れない。このように、偽りの望みが、よみがえりという慰めで、彼らの恐れをなだめているのだ。

# 9〜13章　カエキリウスの演説（二）

9:1 しかも、悪いものほどよく実るのが世の常だ。堕落した風習が日ごとに這い広がるにつれ、あの不敬な寄り合いのおぞましい拝み所が、いまや全世界で育っている。こんな結託は、根こそぎ掘り起こし、呪って捨てるべきだ。9:2 彼らは、ひそかな目印やしるしで互いを見分ける。そして、知り合うか知り合わないうちから、もう愛し合っている。そのうえ彼らのあいだでは、いわば情欲の宗教とでもいうものが、ところかまわず入り乱れている。彼らは互いに、だれかれなく兄弟、姉妹と呼び合う。そのため、ありふれた姦淫でさえ、聖なる名が間に入ることで、近親姦になる。このように、彼らのむなしく狂った迷信は、悪事を誇りとしているのだ。9:3 根に真実がなければ、目ざとい噂が彼らのことを語りはしないだろう。それも、ひどく忌まわしく、詫びの前置きなしには口にできないことをである。聞くところでは、彼らは何やらばかげた思い込みから、最も卑しい家畜の頭[1]を聖なるものとしてあがめているという。こういう風習にふさわしい、こういう風習から生まれた宗教だ！ 9:4 また、こう言う者たちもいる。彼らは自分たちの長であり祭司である者の陰部を拝み、それを自分たちの親のものとして伏し拝んでいる、と。それが偽りかどうかは知らない。だが、ひそかな夜の祭儀には似つかわしい疑いだ！　さらにある者は、犯した罪のために極刑を受けた男と、十字架の不吉な木とが、彼らの儀式の中身だと語る。その者は、堕落した悪人どもに似合いの祭壇をあてがっているのだ。彼らが、自分たちの受けて当然のものを拝むようにというわけだ。9:5 さらに、新入りの手ほどきの話は、知れ渡っているのと同じほど忌まわしい。うかつな者を欺くために、麦粉で覆った赤子が、祭儀の手ほどきを受ける者の前に置かれる。新入りは麦粉の表面にそそのかされ、害のないひと打ちのつもりで打ちかかる。こうして赤子は、見えない、隠れた傷によって殺される。ああ、罰当たりな！　彼らはその血を、渇いた者のようになめる。その手足を、競って分け合う。このいけにえによって彼らは結ばれ、この悪事を共に知ることで、互いに黙っていることを誓い合う。この祭儀は、神聖を汚すどんな行いよりもおぞましい。9:6 宴のことも知れ渡っている。だれもがあちこちで話しているし、わたしたちと同郷のキルタの人の演説も、それを証言している。彼らは定めの日に、子供たちも、姉妹たちも、母親たちもみな連れて、宴に集まる。男も女も、どの年の者もいる。そこで、たらふく食べたあと、宴がほてり、酔った者たちに、近親姦の情欲の熱が燃え上がる。すると、燭台につながれた犬に、つないだ綱が届く先より遠くへ、肉の切れ端を投げてやる。犬はそれで、飛びかかり、跳ね上がるようにけしかけられるのだ。9:7 こうして、事の証人となるはずの明かりが倒れて消える。すると彼らは恥知らずな闇の中で、口にできない欲望の交わりに、くじを引くように行き当たりばったりに絡み合う。全員が行いで近親姦を犯すわけではない。それでも、心の上では、みな等しく近親姦の者だ。一人ひとりの行いで起こりうることは何であれ、全員の望みとして求められているからだ。

10:1 わざと多くのことを省く。いま挙げたことだけでも多すぎるほどだからだ。そのすべてか、少なくとも大部分が本当だということは、このゆがんだ宗教が身を隠していることそのものが明かしている。10:2 実際、彼らはなぜ、自分たちの拝むものが何であれ、あれほど躍起になって覆い隠そうとするのか。立派なことはいつも人目を喜び、悪事はひそかなものだというのに。なぜ彼らは祭壇も神殿も持たず、人に知られた像も一つもないのか。なぜ決して公然と語らず、決して自由に集まらないのか。彼らが拝みながら押し隠しているものが、罰すべきものか、恥ずべきものでないかぎり、そうするはずはないではないか。10:3 それに、あのただ一人の、孤独な、見捨てられた神とは、どこから来た、何者で、どこにいるのか。自由な民も、王国も、ローマの迷信さえも、知らない神ではないか。10:4 ただユダヤ人のみじめな一族だけは、やはり唯一の神を拝んだ。しかし、公然と、神殿や祭壇、犠牲や儀式によってである。その神は、力も権威もまるでなく、自分の民もろとも、ローマの神々の捕虜になっているほどだ。10:5 と

ころが、キリスト者たちときたら、どれほどの化け物、どんな怪異をこしらえることか！　彼らの神は、示すことも見ることもできない神だ。それなのに彼らは言う。その神は、すべての人の品行と行いを、さらには言葉とひそかな思いまでも、念入りに調べ上げるのだと。つまり、その神は至る所を駆けめぐり、どこにでもいるというわけだ。だから彼らはその神を、わずらわしく、落ち着きがなく、恥知らずなほどせんさく好きな者にしたがっているのだ。実際、その神はあらゆる行いのそばに立ち、あらゆる場所をうろつくというのだから。しかし、すべてに散らばっていては、一つ一つに仕えることはできない。一つ一つにかかりきりでは、すべてに手が回らない。

11:1 それだけではない。彼らは、全地にも、星々もろとも世界そのものにも、火で焼き尽くすと脅し、その崩壊をたくらんでいる。まるで、神の法によって定められた自然の永遠の秩序が、かき乱されうるかのようだ。あるいは、あらゆる元素の結びつきが断たれ、天の組み立てが割れて、世界を包み囲むこの巨大な塊が崩れ落ちうるかのようだ。11:2 彼らはこの狂った考えに飽き足らず、老婆の作り話をさらに積み上げ、つなぎ合わせる。死んで灰や燃えかすになったあとに、自分たちは生まれ変わるのだと言う。そして、何やらわからない確信から、互いの嘘を信じ合っている。もう生き返ったのかと思うほどだ。11:3 これは二重の害悪、二重の狂気だ。天と星々は、わたしたちが見いだしたとおりのまま、後に残していくものだ。その天と星々には、滅びを告げる。そのくせ、わたしたちと同じく生まれては死んでいく自分たち、死んで消え去る自分たちには、永遠を約束するのだから！ 11:4 言うまでもなく、だから彼らは火葬の薪を呪い、火による葬りを罪とするのだ。まるで、どんなからだも、たとえ炎を免れても、年月を経れば結局は土に還るのではないかのようだ。また、獣が引き裂こうと、海が呑み込もうと、土が覆おうと、炎が消し去ろうと、何の違いもないのではないかのようだ。死体にとって、どんな葬りも、感じるなら罰であり、感じないなら、片づけの速さそのものが薬なのだから。11:5 この誤りに欺かれて、彼らは、自分たちは善人だから、死んだあとに幸いな、絶えることのないいのちを得ると約束する。ほかの者たちには、不正な者だから、永遠の罰を約束する。話が先を急いでいなければ、これについて言えることはたくさんある。むしろ彼ら自身こそ不正な者だということは、骨を折って示すまでもない。もう示したのだから。もっとも、たとえ彼らを正しい者と認めたとしても、罪も無罪も運命に帰せられるというのが、大多数の人の考えだ。君たちもそれに同意している。11:6 実際、わたしたちのすることは何であれ、ほかの人々が運命に帰するように、君たちは神に帰する。だから君たちの一派では、人は自分から望むのではなく、選ばれた者として望むのだ、ということになる。11:7 それゆえ君たちは、人間の意志ではなく巡り合わせを罰する、不公平な裁き手をこしらえているのだ。それでも、わたしは尋ねてみたい。人がよみがえるのは、からだをもってか、からだなしにか。からだをもってなら、どんなからだでか。もとのからだか、新しくされたからだか。からだなしにか。それなら、わたしの知るかぎり、それは心でも魂でもいのちでもない。もとのからだでか。だが、それはもう先に崩れ去っている。別のからだでか。それなら新しい人間が生まれるのであって、前のあの人が元どおりになるのではない。11:8 それに、これほど長い時代が過ぎ去り、数えきれない世代が流れた。それなのに、冥府から帰って来た者が、ただの一人でもいただろうか。プロテシラオスのように、せめて数時間だけ暇を許されて帰って来た者でもよい。わたしたちが、その例を見て信じられるようにである。11:9 こうしたものはみな、正気を欠いた思い込みの作りごとであり、ばかげた慰めだ。偽りを言う詩人たちが、詩の甘美さのためにもてあそんだものだ。それを、あまりに信じやすい君たちが、君たちの神に合わせて、恥ずかしげもなく作り変えたのだ。

12:1 君たちは、せめて目の前のことからでも、確かめてみようとしない。果たされない約束にかけたむなしい願いが、どれほど君たちを欺いているかをだ。みじめな者たちよ、まだ生きているうちに、死んだあとに何が待ち構えているかを、よく考えてみるがいい。12:2 見よ、君たちの一部は、いや大部分は、乏しさにあえぎ、寒さに凍え、労働と飢えに苦しんでいる。それも、君たちの言うところでは、よりよいほうの者たちがである。それなのに、神はそれを見過ごし、知らぬふりをしている。自分の者たちを助ける気がないか、助けることができないのだ。だから、その神は力がないか、不公平かのどちらかだ。12:3 死んだあとの不死を夢見ている君よ。危険に揺さぶられ、熱に焼かれ、痛みに引き裂かれるとき、君はまだ自分の身の定めを感じないのか。まだ自分のもろさを認めないの

か。みじめな君は、いやおうなしに自分の弱さを突きつけられていながら、それを認めようとしない。12:4だが、だれにでもあることは省こう。見よ、君たちには、脅しと罰と責め苦が待っている。それに、もはや拝むためではなく、身に受けるための十字架もだ。君たちが予言しながら、恐れてもいる火もだ。生き返る者は助けられるのに、生きている者は助けられないあの神は、どこにいるのか。12:5ローマ人は、君たちの神なしに、支配し、王として治め、全世界を楽しみ、君たちをも従えているではないか。ところが君たちは、そのあいだ、宙ぶらりんのまま気をもんで、まっとうな楽しみを断っている。見世物を見に行かず、行列にも加わらない。公の宴は、君たち抜きで開かれる。君たちは、神聖な競技も、初物を取り分けた食べ物も、祭壇に注ぎ分けた飲み物も、忌み嫌う。それほどまでに君たちは、否んでいる神々を恐れているのだ。12:6君たちは花で頭を飾らず、香りでからだを整えもしない。香油は葬式のためにとっておき、花冠を墓にさえ供えようとしない。青ざめ、おびえ、あわれまれて当然の者たちだ。ただし、君たちの神ではなく、わたしたちの神々にあわれまれるべき者たちだ。こうして、みじめな君たちは、よみがえることもなく、それまでのあいだを生きてもいない。12:7それなら、君たちに少しでも知恵か慎みがあるなら、天の領域や、世界の定めと秘密を探るのはやめるがいい。足もとを見ていれば十分なのだ。とりわけ、学がなく、磨かれず、粗野で、田舎じみた者たちにはそうだ。そういう者には、人の世の事柄を理解することさえ与えられていない。まして、神のことを論じるのは許されていない。

13:1もっとも、哲学をしたくてたまらないというのなら、知恵の第一人者ソクラテスにならうがいい。君たちのうちでそれほどの者がいるなら、だれでもだ。できるものならだが。この人は、天のことを尋ねられるたびに、こう答えたことで知られている。「わたしたちの上にあるものは、わたしたちに関わりがない」13:2だから、彼が神託から、並はずれた賢さの持ち主だという証言を得たのは、当然のことだった。その神託の意味を、彼自身もはっきり悟っていた。自分がすべての人の上に置かれたのは、すべてを知り尽くしたからではなく、自分が何も知らないことを学んだからだ、と。このように、無知を認めることこそ、最高の賢さなのだ。13:3この泉から流れ出たのが、最も大きな問いについては疑いにとどめるという、安全な態度だ。アルケシラオスが、またずっと後にはカルネアデスと、アカデメイア派の大多数の人々がそうした。この仕方でなら、学のない者も用心深く、学のある者も誉れをもって、哲学をすることができる。13:4それに、抒情詩人シモニデスのためらいは、だれもが感嘆し、見習うべきものではないか。このシモニデスは、僭主ヒエロンから、神々を何と考え、どのようなものと思うかと尋ねられた。初めは、考えるために一日を求めた。翌日には、二日延ばした。やがて、催促されると、同じだけをもう一度付け加えた。ついに僭主が、これほど延ばすわけを問いただすと、彼はこう答えた。調べが長引くほど、真理は自分にとっていっそう暗くなっていくのだ、と。13:5わたしの考えでも、疑わしいことは、疑わしいままに残しておくべきだ。これほど多くの、これほど偉大な人々がなお思案しているのに、軽はずみに、大胆に、どちらか一方に判定を下すべきではない。老婆じみた迷信が持ち込まれたり、あらゆる宗教が打ち壊されたりしないようにするためだ。

## 訳注

1 写本には『ろばの』とあるが、後の書き込みとみて訳さない。

# 14〜17章　幕間、オクタウィウスの演説（一）

14:1 カエキリウスはこのように話し終えた。あふれ出るように語った弁論の勢いが、彼の憤りの高ぶりをもう和らげていた。それで彼は笑みを浮かべて言った。「どうだ、オクタウィウスはこれに何か言い返す度胸があるのか。プラウトゥスの家系の男で、キリスト者の第一人者[1]ではあるが、哲学者の中では末席の男だ」14:2「彼に勝ったつもりで手をたたくのは、まだやめておけ」とわたしは言った。「両方の側がもっと十分に弁じ終えないうちに、言葉の整った美しさで得意になるのは、君にふさわしくないからだ。とりわけ、君たちの論争は、称賛ではなく真理を求めているのだから」14:3「それに、君の弁論は、その細やかな多彩さで、わたしを大いに楽しませてくれた。それでも、わたしはもっと深く心を乱されている。いまのこの論のことではなく、論じ合うということ全体のことでだ。論じる者の力や雄弁の威力しだいで、明らかな真理でさえ、その立場が変わってしまうことがよくあるからだ」14:4「よく知られているとおり、そうなるのは、聞き手が軽々しく受け入れるせいだ。聞き手は、言葉の色香に引かれて、事柄そのものに向けるべき注意をそらされる。そのあいだに、選びもせずに、言われたことすべてに同意してしまい、正しいものと誤ったものを見分けない。信じがたいことの中にも真実があり、真実らしいことの中にも偽りがあることを、知らないのだ」14:5「だから、聞き手は、言い切られたことを信じることが多いほど、もっと心得のある人々から、それだけしばしば誤りを突かれる。このように、いつも軽はずみのせいで欺かれるので、自分の判断の落ち度を、事柄が不確かだという嘆きにすり替える。その結果、すべてを退けて、欺くものを見分けるより、何もかも判断を控えるほうを選ぶようになる」14:6「それゆえ、わたしたちは用心しなければならない。言論というものすべてを、ことあるごとに憎む病にかかることのないようにだ。ちょうど、素朴な人々の多くが、荒れ狂って、人間を呪い憎むようになるのと同じことだ。実際、不用心に信じやすい人々は、善い人だと思っていた者たちに欺かれる。やがて、同じような思い違いから、もうすべての人を疑うようになる。そして、最も善い人だと見て取ることのできた人々までも、悪人として恐れるのだ」14:7「したがって、わたしたちは心して、できるかぎり念入りに一つ一つを量ろう。どんな事柄においても、両方の側から論じられるからだ。一方の側では、真理がたいていよく見えない。もう一方の側には、驚くほどの精妙さがある。その精妙さは、ときに語り口の豊かさによって、だれもが認める証明のような確かさを装う。量るのは、巧みな理屈は褒めるだけにとどめ、正しいものを選び、よしとし、受け入れることができるようにするためだ」

15:1「君は、良心的な裁き手の務めから外れている」とカエキリウスは言った。「これほど重い論じ合いを途中に差し挟んで、わたしの論の力をくじくのは、ひどく不当だからだ。オクタウィウスは、わたしの言ったことの一つ一つを、手つかずのまま損なわずに、できるなら論駁しなければならないのだから」15:2「君がとがめていることは」とわたしは言った。「わたしの思い違いでなければ、みなの益になるように言ったまでだ。わたしたちの考えを、雄弁のふくらみではなく、事柄そのものの確かさによって、細心の秤にかけて量るためだ。それに、君の嘆くとおり、注意をこれ以上長くそらしておくべきではない。話したくてうずうずしている、われらがイアヌアリウス、つまりオクタウィウスの答えを、すっかり黙って聞けばよいのだから」

16:1 するとオクタウィウスはこう話し始めた。わたしにできるかぎり、力を尽くしてお話しします。あなたも、わたしと力を合わせてください。悪口のひどく苦い汚れを、偽りのない言葉の流れで洗い流すためです。初めに、隠さずに申しましょう。わがナタリス、つまりカエキリウスの考えは、迷い、さまよい、すべりやすく、ぐらついていました。それで、狡猾さのせいでかき乱されたのか、思い違いのせいで揺らいだのか、わたしたちには判じかねるほどです。16:2 実際、彼は、あるときは神々を信じると言い、あるときは自分はまだ思案していると

言って、言い分を変えました。そのため、主張の不確かさのせいで、わたしたちの答えのねらいも、なおさら不確かな土台に据えられることになりました。けれども、わがナタリスに狡猾さがあるとは、わたしは思いたくありませんし、信じてもいません。彼の素朴さは、こざかしい都会風の才気とはまるで縁がありません。16:3では、どういうことでしょうか。正しい道を知らない人は、道がよくあるように一つから幾筋にも分かれるところで、途方に暮れて立ち止まります。一つを選ぶことも、すべてをよしとすることも、思い切ってできません。真実について確かな判断を持たない人も、それと同じです。頼りにならない疑いがあちこちに散らばるにつれて、その人の定まらない考えも散り散りになるのです。16:4ですから、カエキリウスが矛盾し食い違う考えのあいだで繰り返し投げ出され、波立ち、揺れ動いても、不思議ではありません。そうしたことがこれ以上起こらないように、わたしは彼を論破し、反駁しましょう。言われたことはさまざまでも、ただ一つの真理が確かめられ、明らかにされれば、彼はもう疑うこともさまようこともいりません。16:5また、わが兄弟は、声を荒らげてこう言いました。文字に縁がなく、貧しく、無知な者たちが天のことを論じるのは、我慢がならず、腹が立ち、憤ろしく、胸が痛む、と。それなら、知ってもらいましょう。すべての人は、年齢も、性別も、身分も選ばず、理性と感覚をそなえ、それを使える者として生み出されたのです。人は知恵を、運によって手に入れたのではなく、生まれつき植え付けられているのです。それどころか、名の輝きを知性の巧みさでもたらす前は、哲学者たちも、庶民で、学がなく、半ば裸の者と見なされていました。技術を見いだして記憶に残ったほかの人々も、そうでした。実のところ、富む者は自分の財産に縛られて、天よりも黄金を仰ぐのが習いとなっています。そして、わたしたちの仲間の貧しい者たちこそが、賢さを考え出し、ほかの人々に教えを伝えたのです。こうしてみると、才は、財産によって与えられるのでも、学びによって得られるのでもありません。知性が形づくられるのと共に生まれるのです。16:6ですから、だれであれ、神のことを探り求め、思うところを口にしても、憤ることも、胸を痛めることもありません。求められているのは、論じる者の権威ではなく、論じ合いそのものの真理だからです。さらに、言葉が拙いほど、道理はいっそう明らかになります。弁舌と優美さのきらびやかさで塗り立てられることなく、あるがままに、正しさの物差しに支えられているからです。

17:1カエキリウスが、とくに大切なこととして言い張ろうと努めたことを、わたしも拒みはしません。人は自分自身を知り、自分が何であり、どこから来て、何のためにあるのかを、よく見きわめるべきだ、ということです。人は元素が固まったものか、原子が組み合わさったものか。それともむしろ、神が造り、形づくり、いのちを吹き込まれたものなのか、ということです。17:2このことそのものを、宇宙全体を探らずに調べ上げ、掘り起こすことはできません。すべては互いにつながり、結ばれ、鎖のように連なっているからです。そのため、神のあり方を念入りに探らなければ、人間のあり方は分かりません。また、すべての者に共通の、この世界という国を知らなければ、国のことをうまく営むこともできません。とりわけ、わたしたちは獣と次の点で違うのですから。獣はうつむいて地に向かい、餌のほかは何も見るように生まれついていません。しかしわたしたちには、まっすぐ上を向いた顔と、天を仰ぐまなざしが与えられ、言葉と理性も与えられています。わたしたちは、それによって神を認め、感じ、まねるのです。そのわたしたちが、自分から目と感覚に迫ってくる天の輝きを知らずにいることは、許されず、できもしません。17:3実際、高いところで見いだすべきものを地べたで探すのは、神聖を汚す行いの中でも最大のものに等しいからです。ある人々は、この全世界の美しい飾りが、神の理性によって仕上げられたのではないと言いたがります。何かのかけらがでたらめにくっつき合って、丸く固まったのだというのです。それだけに、そういう人々は、知性も、感覚も、さらには目そのものさえ持っていないと、わたしには思えます。17:4実際、目を天に上げ、下や周りのものを見渡したとしましょう。そのとき、これほど明らかで、これほど認められ、これほどはっきりしたことがあるでしょうか。それは、この上なくすぐれた知性をそなえた、何らかの神的な力があるということです。自然のすべては、その力によって息を吹き込まれ、動かされ、養われ、治められているのです。17:5天そのものを見てください。どれほど広く張り渡され、どれほど速く回っていることでしょう。夜には星々で飾られ、昼には太陽に照らされています。そうすれば、すぐに分かるでしょう。そこには、至高の統べ手による、驚く

べき、神の釣り合いがあるのです。一年も見てください。太陽の巡りがそれを作ります。ひと月も見てください。月が満ち、欠け、隠れながら、ひと月を巡らせるのです。17:6 闇と光が代わる代わる戻ってきて、わたしたちに働きと休みを交互に新しくしてくれることを、何と言えばよいでしょうか。星についての長い話は、天文家に任せておくべきです。星が航海の進路を導くことも、耕す時と刈り入れる時を示すことも、です。これらの一つ一つは、造られ、生じ、配置されるために、至高の匠と完全な理性を必要としただけではありません。最高の巧みさと理性なしには、感じ取ることも、見抜くことも、理解することもできないのです。17:7 では、どうでしょうか。季節と実りの秩序は、変わらない移り変わりによって分けられています。そのとき、春も夏も秋も冬も、みな同じように、自分の造り主であり親である方を証言しているではありませんか。春はその花で、夏はその刈り入れで、秋は喜ばしい実りで、冬はなくてはならないオリーブの取り入れで、そうするのです。この秩序は、最大の理性によって成り立っているのでなければ、たやすく乱れてしまうでしょう。17:8 また、摂理はなんと大きいことでしょう。冬だけが氷で凍てつかせることも、夏だけが暑さで焦がすこともないように、秋と春という、ほどよい中間を差し挟んだのです。それは、年が自分の足跡をたどって巡ってくるとき、その移り変わりが、気づかれず、害もなく、すべるように過ぎていくためです。17:9 海に目を向けてください。海は岸の掟に締めつけられています。あらゆる木を見てください。大地のはらわたから、なんといのちを得ていることでしょう。大洋を見てください。満ち引きする潮で寄せては返します。泉を見てください。絶えることのない水脈から湧き出ています。川を見つめてください。休みなく流れ続けて、いつも進んでいきます。17:10 山々のそびえるさま、丘のうねり、平野の広がりが、ふさわしく配置されていることを、何と言えばよいでしょうか。生き物が互いから身を守る、さまざまな形の備えを、何と言えばよいでしょうか。あるものは角で武装し、あるものは歯で囲まれ、ひづめで足場を固め、とげで身を尖らせています。あるいは、足の速さや、翼で高く舞い上がることによって、自由に逃れます。17:11 とりわけ、わたしたちの姿の美しさそのものが、神が造り手であることを告白しています。まっすぐに立つ姿勢、上を向いた顔、見張り台にいるように高いところに置かれた目がそうです。城塞に収められたように並ぶ、ほかのすべての感覚もそうです。

## 訳注

1 写本では『粉ひきの第一人者』。粉ひきをした喜劇詩人プラウトゥスにかけた皮肉。

# 18〜19章　オクタウィウスの演説（二）

18:1 一つ一つたどっていけば、長くなります。人間の肢体で、必要のためと見栄えのためを兼ねていないものは、一つもありません。さらに驚くべきことに、すべての人に同じ形がありながら、一人一人に、どこか少しずつ違えた輪郭があります。こうして、わたしたちは、みなとしては似て見えながら、一人一人を比べると似ていないのです。18:2 生まれるということの仕組みはどうでしょうか。子をもうけたいという欲求はどうでしょうか。それは神がお与えになったものではありませんか。出産が近づくにつれて乳房に乳が満ちることも、か弱い子が乳のしずくの豊かさで育つことも、そうではありませんか。18:3 神は、宇宙の全体にだけでなく、その部分にも心を配っておられます。ブリタンニアは日の光に乏しいですが、周りを流れる海のぬくもりで生き返ります。エジプトの乾きはナイル川がやわらげ、ユーフラテス川はメソポタミアのために雨の代わりをします。インダス川は、東方に種をまきもし、水を注ぎもすると言われます。18:4 もしあなたが、ある家に入って、すべてが手入れされ、整えられ、飾られているのを見たなら、きっとこう信じるでしょう。その家をつかさどる主人がいて、その主人は、あの立派な品々よりもはるかにすぐれている、と。同じように、この世界という家で、天と地を見渡して、摂理と秩序と掟を見抜くなら、信じてください。宇宙の主人であり親である方がおられ、その方は、星々そのものよりも、全世界のどの部分よりも美しい、と。18:5 ただし、もしかすると、あなたはこう考えるかもしれません。摂理があることには、疑いの余地がない。だから、天の王国がひとりの支配で治められるのか、多くの者の裁量で治められるのかを調べるべきだ、と。そのこと自体も、地上の支配を考えてみる人には、答えを出すのに大した苦労はいりません。地上の支配は、まさしく天を手本にしているのです。18:6 王権を分け合うことが、信義をもって始まったり、血を流さずに終わったりしたことが、いつかあったでしょうか。馬のいななきで王位を占ったペルシャ人のことは、省きます。テーバイの二人の兄弟という、もう死んだ話も素通りします。羊飼いたちと小屋だけの王国をめぐる双子の兄弟のことは、よく知られた言い伝えです。婿と舅の戦いは、全世界に広がりました。これほど大きな支配の運でも、二人を容れることはできなかったのです。18:7 ほかのものも見てください。蜜蜂には王がひとり、羊の群れには先導がひとり、牛の群れには導き手がひとりです。それなのに、あなたは、天では最高の威厳が分けられ、あのまことの、神的な支配の全権能が裂かれていると信じるのでしょうか。万物の親である神に、始まりも終わりもないことは、明らかであるのにです。神は、すべてのものに生まれをお与えになり、ご自身には終わりなく続くことをお与えになります。世界ができる前には、ご自身がご自身にとって世界の代わりでした。神は、存在するものすべてを、言葉によって命じ、理性によって整え、御力によって仕上げられるのです。18:8 この方を、見ることはできません。目で見るには明るすぎるからです。つかむこともできません。手でふれるには清すぎるからです。量ることもできません。感覚よりも大きいからです。この方は、無限で、測り知れず、ご自身がどれほど大きいかを、ご自身だけが知っておられます。しかし、わたしたちの胸は、この方を理解するには狭すぎます。それゆえ、わたしたちは、この方を量りえない方と言うときに、ふさわしく量っているのです。18:9 わたしが感じているとおりに言いましょう。神の大きさを知っていると思う者は、それを小さくしています。小さくしまいとする者は、それを知らないのです。18:10 神に名を求めてはなりません。『神』が名なのです。呼び名が要るのは、大勢のものを、一つ一つに固有の呼び方の印を付けて分けなければならないときです。ただひとりである神には、『神』という呼び名がすべてです。この方をわたしが父と呼べば、あなたは肉の者だと思うでしょう。王と呼べば、地上の者だと疑うでしょう。主人と呼べば、きっと死すべき者と受け取るでしょう。名に付け加えたものを取り去ってください。そうすれば、この方の輝きを見抜くでしょう。18:11 それに、このことについては、わたしはすべての人の同意を得ているではありません

か。わたしは民衆の言うことを聞きます。彼らは、天に手を差し伸べるとき、「神よ」「神は偉大だ」「神はまことだ」「神が与えてくださるなら」としか言いません。これは民衆の生まれつきの言葉でしょうか。それとも、信仰を告白するキリスト者の語りでしょうか。ユピテルを首位の神としたがる人々も、名を取り違えているだけで、ただ一つの権能については同意しているのです。

19:1 詩人たちも、ただひとりの『神々と人間の父』を説いているのを、わたしは聞きます。また、『死すべき者の心は、万物の親がもたらす日のとおりになる』とも言っています。19:2 マントゥア生まれのマロ、つまりウェルギリウスはどうでしょうか。もっとはっきりと、わたしたちにもっと近く、もっと真実に言っているではありませんか。『初めに、天と地を』、そして世界のほかの肢体を、『霊が内から養い』、注ぎ込まれた知性が動かす。『そこから人間と家畜の種族が』、またほかのどんな生き物も生まれる、と。同じ詩人は、別の箇所で、この知性と霊を神と呼んでいます。実際、その言葉はこうです。『神は、すべての地と、海の広がりと、深い天を巡っているからだ。そこから人間と家畜が、そこから雨と火が生まれる』。19:3 わたしたちもまた、神を、知性と理性と霊のほかの何として説いているでしょうか。よろしければ、哲学者たちの教えをひととおり見てみましょう。あなたは気づくでしょう。彼らは、言葉はさまざまでも、事柄そのものにおいては、この一つの考えに集まり、心を合わせているのです。19:4 あの粗野な昔の人々のことは、省きます。その言葉によって賢者の名を得た人々です。だれよりも先に挙げるのは、ミレトスのタレスとしましょう。だれよりも先に天のことを論じた人です。このミレトスのタレスは、万物の始まりを水だと言い、神とは、水からすべてを形づくった知性だと言いました[1]。ご覧のとおり、筆頭の哲学者の考えは、わたしたちの考えと深く響き合っているのです。19:5 続いてアナクシメネスが、その後でアポロニアのディオゲネスが、無限で測り知れない空気を神と定めています。この人々も、神性については同じように一致しているのです。19:6 また、アナクサゴラスは、無限の知性による秩序づけと動きを神と言います。ピュタゴラスにとって、神とは、万物の自然全体に行き渡り、張りわたされた魂です。すべての生き物のいのちも、そこから受け取られるのです。19:7 よく知られているとおり、クセノパネスは、知性をそなえた無限の全体を神だと教えています。アンティステネスは、民間の神々は多いが、自然の神はただひとりで、それが際立っていると教えています。スペウシッポスは、万物を導く生きた力を神と認めています。19:8 では、どうでしょうか。デモクリトスは、原子を最初に見いだした人ですが、像を送り出す自然と理解力を、たいてい神と言っているではありませんか。ストラトンもまた、自然を神と言っているではありませんか。あのエピクロスでさえ、神々を何もしない者か、まったくいない者として思い描きながらも、やはり自然を上に置いているのです。19:9 アリストテレスは、説が揺れていますが、それでもただ一つの権能を指し示しています。あるときは知性を、あるときは世界を神と言い、あるときは世界の長として神を立てるからです。ポントスのヘラクレイデスも、言い方はさまざまですが、神に神的な知性を帰しています。19:10 テオプラストスも説が揺れていて、あるときは世界に、あるときは神的な知性に首位を与えます。ゼノンとクリュシッポスとクレアンテスも、説がいろいろな形をとります。しかし、みな摂理がただ一つであることに立ち返ります。実際、クレアンテスは、あるときは知性を、あるときは魂を、あるときはアイテールを、たいていは理性を、神だと論じました。クレアンテスの師ゼノンは、自然の、また神的な掟を、そしてあるときはアイテールを、ときには理性を、万物の始まりだとします。同じゼノンは、ユノは空気、ユピテルは天、ネプトゥヌスは海、ウルカヌスは火だと解き明かします。そして、ほかの民衆の神々も同じように元素だと示します。そうすることで、世間の誤りを厳しくとがめ、論破しているのです。19:11 クリュシッポスもほぼ同じです。神の力、理性ある自然、またあるときは世界、そして運命の必然を、神と信じています。また、ヘシオドスとホメロスとオルフェウスの詩を自然学として解き明かす点で、ゼノンにならっています。19:12 バビロンのディオゲネスも、説明し論じるやり方を持っています。ユピテルが産んだこと、ミネルウァが生まれたこと、そのたぐいのほかのことは、神々のではなく、事物の呼び名だというのです。19:13 実際、ソクラテスの弟子クセノポンは、まことの神の姿は見ることができず、それゆえ探し求めるべきではない、と言います。ストア派のアリストンは、神はまったくつかむことができない、と言います。二人とも、理解しえないと思い知ることで、神の威厳を感じ取ったのです。19:14 プラトンの神についての語りは、

事柄そのものにおいても名においても、もっとはっきりしています。ときどき国の通念が混じって汚れることがなければ、すべて天にふさわしい語りでしょう。ですから、プラトンの『ティマイオス』では、神は、その名そのもので呼ばれています。世界の親、霊魂の造り手、天のものと地のものの製作者という名です。プラトンは前置きして言います。その神は、あまりに大きく信じがたい権能のゆえに、見いだすことが難しく、見いだしても、公に語ることはできない、と。

19:15 これらは、わたしたちの考えとほとんど同じです。わたしたちも神を知り、万物の親と呼び、問われないかぎり公に説くことはしないからです。

## 訳注

1 写本には『水と霊の理は神から授かった』とあるが、後の書き込みとみて訳さない。

# 20〜22章　オクタウィウスの演説（三）

20:1 わたしは、ひときわ輝かしい誉れを持つ、ほとんどすべての哲学者の説を述べました。彼らは、多くの名によってではあっても、ただひとりの神を指し示したのです。そのため、だれでもこう考えるほどです。今キリスト者が哲学者であるのか、それとも哲学者がすでにそのころからキリスト者であったのか、と。20:2 もし世界が摂理によって導かれ、ただひとりの神のうなずきによって治められているとしましょう。それなら、無知な人々のいにしえは、自分の作り話を喜び、あるいはそれにとらわれています。そのいにしえが、わたしたちを、互いに同意し合うという誤りへ引きずり込むことがあってはなりません。いにしえは、その人々自身の哲学者の考えによって論破されているからです。その哲学者たちには、理性の権威も、古さの権威も味方しています。20:3 実際、わたしたちの先祖は、嘘をあまりにたやすく信じたので、このような怪物じみた驚異までも、軽はずみに信じてしまいました。いくつもの体を持つスキュラ、さまざまな形を持つキマイラがそうです。傷を受けるたびにそこから豊かに生え変わるヒュドラ、馬が自分の人の体と一つに絡み合ったケンタウロスもそうです。うわさが作り上げてよいものは、何でも、彼らは喜んで聞いたのです。20:4 あの老婆の作り話はどうでしょうか。人間から鳥や獣が、また人間から木や花ができたという話です。もしそれが本当に起こったことなら、今も起こるでしょう。起こりえないのですから、起こりもしなかったのです。20:5 同じように、わたしたちの先祖は、神々についても、先を見ずに信じやすく、粗野な素朴さで信じてしまいました。彼らは、自分たちの王をうやうやしく拝みました。亡くなった王を慕って肖像の中に見ようとし、その思い出を立像の中にとどめておきたいと願いました。そうするうちに、慰めとして取り入れたものが、祭儀になったのです。20:6 さらには、世界が交易で開かれ、民どうしが儀礼や習わしを混ぜ合わせる前から、どの民族も自分たちの建国者をあがめていました。また、名高い将軍や、女の身にまさって雄々しい貞淑な女王をあがめていました。あるいは、何かの恵みや技を見いだした人をあがめていました。どの人も、よい思い出を残した市民としてあがめていたのです。こうして、亡くなった人には報いが、後の人々には手本が与えられました。

21:1 歴史家の書いたものか、賢者たちの書いたものを読んでみてください。わたしと同じことを、あなたも認めるでしょう。エウヘメロスは、徳や恵みの功績のゆえに神とみなされた人々のことを、詳しく述べています。そして、その人々の誕生と故郷と墓を数え上げ、属州ごとに示しています。ディクテのユピテル、デルポイのアポロ、ファロスのイシス、エレウシスのケレスの、誕生と故郷と墓です。21:2 プロディコスは、さまよううちに新しい作物を見いだして人間の役に立った人々が、神々の中に加えられたと語ります。ペルサイオスも同じ考えで哲学を論じ、見いだされた作物と、その作物を見いだした人々とを、同じ名で結びつけています。喜劇の言葉に、リベル（ぶどう酒）とケレス（穀物）がなければウェヌスは冷える、とあるとおりです。21:3 あのマケドニアのアレクサンドロス大王は、よく知られた一巻の手紙で、母に書き送りました。神々が人間であったという秘密を、大王の権能を恐れた祭司が明かしてくれた、というのです。その手紙の中で、大王は、ウルカヌスをすべての者の中で首位の者とし、その後にユピテルの一族を置いています。21:4 実際、この一族、この群れの首位の者であるサトゥルヌスを、昔のギリシアとローマの著述家はみな、人間だったと伝えています。ネポスもカッシウスも、その歴史書でこれを知っており、タッロスとディオドロスもこれを語っています。21:5 そこで、このサトゥルヌスは、荒れ狂う息子を恐れて、クレタから逃れてイタリアに来ていました。そして、ヤヌスに客として迎えられ、あの粗野で野育ちの人々に多くのことを教えました。ギリシア人の小物で、あか抜けていたからです。文字を記すこと、貨幣に刻印を打つこと、道具を作ることを教えたのです。21:6 ですから、サトゥルヌスは、自分の隠れ場を、そこに無事に隠れていた（ラテオー）ので、ラティウムと呼ばせることにし

ました。また、同じサトゥルヌスは自分の名からサトゥルニアという町を、ヤヌスはヤニクルムを、二人とも後の世の記憶に残したのです。21:7 それゆえ、逃げた者は、まさしく人間です。隠れた者も、まさしく人間です。人間の父であり、人間から生まれた者です。実際、サトゥルヌスが大地の子とも天の子とも呼ばれたのは、イタリアの人々に、親の知れない者として伝えられたからです。それは、今日でも、思いがけず現れた人を「天から降ってきた人」と呼ぶのと同じです。生まれの卑しい、素性の知れない人を「大地の子」と呼ぶのとも同じです。21:8 その子ユピテルは、父を締め出してクレタで王となり、そこで死に、そこで子をもうけました。今でもユピテルの洞穴を訪ねる人があり、その墓も示されています。ユピテルは、自分の祭儀そのものによって、人間であったことを暴かれているのです。21:9 一人一人たどって、この一族の系譜をすべて述べ立てるのは、むだなことです。最初の親たちのうちに明らかにされた死すべき定めが、継承の順序そのものに従って、ほかの者たちにも流れ込んでいるからです。ただし、あなたがたが、人の死後に神々を作り上げるというなら、話は別です。偽りの誓いを立てたプロクルスによって、ロムルスが神となったようにです。マウリ人が望んだので、ユバが神であり、ほかの王たちも神とされた者であるようにです。その王たちは、神的な力を信じてではなく、果たし終えた権能をたたえるために、神として祀られるのです。21:10 さらには、この名は、本人が望まないのに書き加えられるのです。彼らは人間のままでいたいと願い、神にされることを恐れます。もう年老いていても、それを望まないのです。したがって、神々は死んだ者から生じるのではありません。神というものは死ぬことができないからです。生まれた者から生じるのでもありません。生まれるものはみな死ぬからです。神的なものとは、生じることも滅びることもないもののことです。21:11 実際、もし神々が生まれたのなら、なぜ今日も生まれないのでしょうか。ただし、ユピテルがもう年老い、ユノが子を産めなくなり、ミネルウァが子を産む前に白髪になったというのなら、話は別です。それとも、このような作り話にもうだれも同意しないので、神々の生まれが途絶えたのでしょうか。21:12 それに、もし神々が子を生み出すことができ、しかも滅びることができないとしましょう。それなら、わたしたちは、すべての人間よりも多くの神々を持っていることになるでしょう。そうなれば、もう天も神々を収めきれず、空気も入れきれず、大地も支えきれないでしょう。ここから明らかなように、生まれたと読み、死んだと知っているあの者たちは、人間だったのです。イシスの燕と鳴り物のシストルムを見てください。また、手足が散らされて空になった、あなたのセラピス、つまりオシリスの墓を見てください[1]。

22:1 さらには、祭儀そのもの、秘儀そのものを考えてみてください。そこにあなたが見いだすのは、あわれな神々の悲しい最期、運命、葬り、嘆きと哀哭です。イシスは、失った息子を、自分の犬の頭の神と、頭を丸めた祭司たちとともに嘆き、胸を打ち、捜し求めます。そして、あわれなイシスの信者たちも胸をたたき、このうえなく不幸な母の悲しみをまねます。やがて幼子が見つかると、イシスは喜び、祭司たちは躍り上がり、見つけた犬の頭の神は得意になります。そして彼らは、毎年、見つけたものを失い、失ったものを見つけることをやめないのです。22:2 拝むものを嘆いたり、嘆くものを拝んだりするのは、笑うべきことではありませんか。それなのに、かつてエジプトのものだったこの祭儀は、今ではローマの祭儀にもなっています。ケレスは、松明をともし、蛇に巻かれて、さまよううちにさらわれて汚された娘のリベラを、不安と心配のうちに捜し回ります。これがエレウシスの祭りです。22:3 では、ユピテルの祭儀はどうでしょうか。乳母は雌山羊です。赤子は、呑み込まれないように、貪る父から隠されます。そして、父に泣き声が聞こえないように、コリュバンテスのシンバルで、鳴り響く音が打ち鳴らされます。22:4 キュベレのディンデュマの祭儀は、口にするのも恥ずかしいことです。キュベレは、不幸にも気に入ってしまった情夫を、淫らな交わりに誘うことができませんでした。自分が醜く年老いていたからです。多くの神々の母なのですから、当然です。そこで、その情夫を去勢しました。もちろん、神を宦官にするためです。この作り話のために、ガッリと呼ばれるキュベレの祭司たちは、この女神を拝みます。自分たちも半ば男の身で、自分の体に罰を科して拝むのです。これはもはや祭儀ではありません。責め苦です。22:5 どうでしょうか。姿そのものや装いが、あなたがたの神々の笑いぐさと不面目を暴いているではありませんか。ウルカヌスは足の不自由な、弱い神です。アポロは、何代たってもひげがありません。アエスクラピウスは、いつまでも若いアポ

ロの息子なのに、立派なひげを生やしています。ネプトゥヌスは緑がかった目、ミネルウァは灰青色の目、ユノは牛の目をしています。メルクリウスは翼のある足、パンは蹄のある足、サトゥルヌスは足かせをはめた足です。ヤヌスは、後ろ向きにも歩くかのように、額を二つ持っています。ディアナは、あるときは裾を高くからげた狩人です。エフェソスのディアナとしては、多くの乳と乳房を盛り上げた姿です。三叉路の女神トリウィアとしては、三つの頭と多くの手で恐ろしい姿をしています。22:6 あなたがたのユピテル自身はどうでしょうか。あるときはひげのない姿で立てられ、あるときはひげのある姿で据えられます。ハンモンと呼ばれるときは角を持ち、カピトリウムのユピテルのときは雷を手にします。ラティアリスのときは血を浴び、フェレトリウスのときは最高の戦利品をまとっています[2]。多くのユピテルをこれ以上たどるのはやめましょう。ユピテルの名の数だけ、ユピテルの奇怪な姿があるのです。22:7 エリゴネは、乙女として星々のあいだで輝くために、輪縄で首をつりました。カストルの兄弟は、生きるために、かわるがわる死にます。アエスクラピウスは、神へと昇るために、雷に打たれます。ヘルクレスは、人間を脱ぐために、オエタ山の火で焼き尽くされます。

## 訳注

1 この一文は写本が崩れていて、意味も置き場所も定まらない。

2 写本では『聞かれない』とあり、意味が定まらない。推定に従って訳した。

# 23〜25章　オクタウィウスの演説（四）

23:1 このような作り話と誤りを、わたしたちは無知な親たちから学びます。さらに重いことに、わたしたち自身が、学業と教えの中で、それを念入りに身につけます。とりわけ、詩人たちの歌によってです。詩人たちは、その権威によって、真理そのものをこのうえなく害してきました。23:2 そのため、プラトンは見事にも、あの名高いホメロスを追い出しました。称えて冠をかぶせたうえで、自分が対話篇の中で築いていた国から追い出したのです。23:3 ホメロスこそが、トロイア戦争の詩の中で、あなたがたの神々を人間の出来事や行いの中に混ぜ込んだ第一の者だったからです。戯れに描いたとはいえ、そうしたのです。ホメロスは、神々を剣闘士のように二人ずつ組み合わせました。ウェヌスに傷を負わせ、マルスを縛り、傷つけ、敗走させました。23:4 ホメロスの語るところでは、ユピテルは、ほかの神々に縛られないように、ブリアレオスによって解き放たれました。また、息子サルペドンを死から救い出すことができなかったので、血の雨を降らせて泣きました。また、ウェヌスの帯に誘われ、姦通の相手に向かういつもの激しさにもまさって、妻ユノと寝ました。23:5 ほかの所では、ヘルクレスが糞を運び出し、アポロがアドメトスのために家畜を飼います。ネプトゥヌスはラオメドンのために城壁を築きますが、不運な築き手は、その仕事の報酬を受け取りません。23:6 またある詩では、ウルカヌスが、ユピテルの雷を、アエネアスの武具とともに、金床の上で鍛えています。しかし、天も雷も稲妻も、ユピテルがクレタで生まれるよりずっと前からあったのです。また、本物の雷の炎は、キュクロプスもまねることができず、ユピテル自身もおののかずにはいられませんでした。23:7 マルスとウェヌスの姦通が見つかったことを、どうして語る必要があるでしょうか。ガニュメデスとのユピテルの淫らな交わりが、天で聖なるものとされたことも同じです。これらはみな、人間の悪徳に何らかの権威を与えるために伝えられたのです。23:8 このような、またこれに類する作り事と、あまりに甘い嘘によって、子供たちの天性はそこなわれます。そして子供たちは、同じ作り話が身にこびりついたまま、人生の最も盛んな時期まで育ちます。そして、同じ説の中で、あわれにも老いていきます。真理はすぐ目の前にあるのにです。ただし、求める者の目の前にです。23:9 したがって、民衆が、神として祀られた人間たちの肖像に祈り、公に拝んでいることを、だれが疑うでしょうか。無知な人々の思い込みと知性が、技の整った美しさにだまされ、金の輝きに目をくらまされているからです。銀のつやと象牙の白さに鈍らされているからです。23:10 もしだれかが、どんな責め苦にかけ、どんな仕掛けを使って、像がみな形作られるかを思い浮かべるなら、その人は恥じるでしょう。造り手が神を作るためにもてあそんだ材料を、自分が恐れていることを恥じるのです。23:11 木の神は、もしかすると火葬の薪か、不吉な絞首台の木の切れ端かもしれません。その木の神が、吊るされ、切られ、削られ、かんなをかけられるからです。23:12 また、青銅か銀の神は、汚れた器から溶かし出されます。聞くところでは、エジプトの王がそうしたといいます。そして、鎚でたたかれ、金床の上でかたどられます。また、石の神は、切られ、刻まれ、汚らわしい人間によって磨かれます。それでも、石の神は、自分が生まれるときに受けた非道な仕打ちを感じません。同じように、後になって、あなたがたがあがめて拝むことも感じないのです。ただし、石や木や銀は、まだ神ではないというのなら、話は別です。23:13 それで、この神はいつ生まれるのでしょうか。見てください。鋳られ、鍛えられ、彫られます。まだ神ではありません。見てください。鉛で継がれ、組み立てられ、立てられます。それでもまだ神ではありません。見てください。飾られ、神として祀られ、祈りを受けます。そのときようやく、それは神なのです。人間が、それを神であれと望み、奉献したときにです。

24:1 口のきけない動物たちのほうが、生まれつきの感覚で、あなたがたの神々について、どれほど正しく判断していることでしょう。ネズミや燕や鳶は、神々が何も感じないことを知っています。かじり、踏みつけ、上にとまり、追い払わ

なければ、あなたがたの神の口そのものに巣を作ります。そしてクモは、その顔に巣を張りめぐらし、頭そのものから自分の糸を垂らします。24:2 あなたがたは、それをぬぐい、清め、こすります。そして、自分で作ったものを守り、しかも恐れます。それは、あなたがたのだれもが、神を拝むより先に、神をよく知らなければならないと考えないからです。思慮もなく親に従おうとはやり、自分を信じるより、他人の誤りに加わる者となることを好むからです。恐れているもののことを、何一つ知らないからです。このようにして、金と銀の中で、貪欲が神として祀られました。このようにして、うつろな立像の形が、聖なるものとして封じられました。このようにして、ローマの迷信が生まれたのです。ローマ人の儀礼を数え上げてみてください。なんと多くのことが笑うべきであり、なんと多くのことが、あわれむべきでさえあることでしょう！24:3 ある者たちは、厳しい冬に裸で走り回ります。ほかの者たちは、毛織りの帽子をかぶって練り歩き、古い盾を担いで回ります。太鼓の皮を打ち鳴らし、物乞いをしながら、通りから通りへと神々を引いて回ります。ある社には年に一度だけ近づくことを許し、ある社は見ることさえまったく許されません。男が近づいてはならない所もあり、女を除いて行う祭儀もいくつかあります。奴隷がある儀式に立ち会うことさえ、償いを要する不埒な行いとされます。ある祭儀には、夫を一人しか持たなかった女が冠を捧げ、ある祭儀には、夫を何人も持った女が冠を捧げます。そして、より多くの姦通を数えられる女が、たいそうな宗教の熱心さで探し求められるのです。24:4 どうでしょうか。自分の血を注いで供え、自分の傷で祈願する者は、そのように信心深いより、むしろ不信心であるほうがよいのではありませんか。また、陶片で恥部を切り取った者はどうでしょうか。このようにして神をなだめる者が、どうして神を汚さないことがあるでしょうか。もし神が宦官を望むのなら、宦官にするのではなく、宦官として生み出すことができるはずですから。24:5 正気を失った者たち、むなしく堕落した知性の者たちが、こうしたことで愚かになっています。迷う者の群れそのものが、互いにかばい合っています。そのことを、だれが理解しないでしょうか。ここでは、皆に共通する狂気の弁護は、狂う者たちの数の多さなのです。

25:1 「それでも、まさにこの迷信が、ローマ人に支配を与え、広げ、打ち立てたのだ。彼らは、勇気によってよりも、宗教と敬虔によって力をふるっていたのだから」と、あなたは言うでしょう。なるほど、ローマのよく知られた気高い正義は、生まれたばかりの支配の揺りかごのときから、めでたい鳥の兆しのもとに始まったのです。25:2 ローマ人は、その始まりのときに、悪事によって寄り集まったのではありませんか。そして、自分たちの凶暴さの恐ろしさで守りを固めて、大きくなったのではありませんか。実際、最初の住民は避難所に集められました。そこには、身を持ち崩した者、罪を犯した者、不貞の者、刺客、裏切り者が流れ込んでいました。そして、総大将であり指導者であるロムルス自身が、罪で自分の国の人々にまさるために、身内殺しをしたのです。これが、信心深い都の、最初の鳥の兆しです。25:3 やがてロムルスは、よその乙女たちを、習わしも顧みずにさらい、汚し、もてあそびました。すでに婚約した乙女も、すでに嫁ぎ先の決まった乙女も、また結婚している女たちの幾人かまでもです。そして、その親たち、つまり自分のしゅうとたちと戦いを交え、身内の血を流しました。これ以上に不信心なこと、これ以上に大胆なことがあるでしょうか。悪事のずうずうしさそのもののために、これ以上に恥ずべきことがあるでしょうか。25:4 さらに、隣人を土地から追いやり、近くの町々を神殿や祭壇もろとも滅ぼし、捕らえた者を追い立てること。他人の損失と自分の悪事によって育つこと。これが、ロムルスにも、ほかの王たちにも、後の将軍たちにも共通する教えなのです。25:5 このように、ローマ人が保ち、住み、所有しているものは、何であれ、大胆さの獲物です。神殿はどれも分捕り品から建てられました。つまり、町々の廃墟と、神々から奪った戦利品と、祭司たちの殺戮から建てられたのです。打ち負かした宗教に仕え、勝利の後に捕らわれの身となった宗教を拝むこと、これはあざけり、もてあそぶことです。実際、手で捕らえたものを拝むのは、神的な力ではなく、神聖を汚す行いを神として祀ることです。25:6 したがって、ローマ人が凱旋した回数だけ、ローマ人によって不敬が行われたのです。民から得た戦勝記念碑の数だけ、神々から奪った戦利品があるのです。それゆえ、ローマ人がこれほど大きくなったのは、信心深かったからではありません。罰を受けずに神聖を汚したからです。25:7 戦いのさなかには、自分たちが武器を取って向かっていった

神々を、助け手とすることはできなかったからです。そうではなく、打ち倒した神々を、凱旋で打ち負かしたのちに、拝み始めたのです。この神々は、自分の側の人々のためにさえ、ローマ人の武器に対して何の力も持ちませんでした。では、その神々が、ローマ人のために何ができるでしょうか。実際、ローマ人の生え抜きの神々なら、わたしたちも知っています。ロムルス、ピクス、ティベリヌス、コンスス、ピルムヌス、ウォルムヌスという神々です。25:8 クロアキナは、タティウスが見いだして拝みました。ホスティリウスは、恐れの神と蒼白の神を拝みました。やがて、だれだか知らない者によって、熱病の女神が奉献されました。これが、あなたがたのその都が育てた迷信、つまり病と不健康なのです。確かに、アッカ・ラレンティアとフロラという恥知らずの娼婦たちも、ローマ人の病と神々の中に数えなければなりません。25:9 もちろん、この神々が、ほかの民の中で拝まれていた神々に打ち勝って、ローマ人の支配を広げたのでしょう。自分の側の人々に背いてまでローマ人を助けた神は、一人もいなかったからです。トラキアのマルスも、クレタのユピテルも助けませんでした。あるときはアルゴスの、あるときはサモスの、あるときはカルタゴのユノも助けませんでした。タウリのディアナも、イダの母神も、あのエジプトの、神的な力ならぬ化け物どもも、助けませんでした。25:10 ただし、ローマ人のもとでは、乙女たちの貞潔がまさり、祭司たちの宗教がより聖なるものだったというのなら、話は別です。しかし、ほとんど大半の乙女たちに、不貞の罰が下されました。それも、不用意に男と交わった者たちに限ってです。確かに、ウェスタの知らぬうちにです。残りの者たちが罰を免れたのは、貞潔がより確かだったからではなく、不品行の運がよかったからです。25:11 では、淫らな交わりが取り持たれ、女衒の取引がなされ、姦通がたくらまれる所はどこでしょうか。祭壇と聖所のあいだで祭司たちによってほど、それが多く行われる所が、ほかにあるでしょうか。さらには、娼家そのものよりも神殿の番人の小部屋でこそ、燃える情欲が頻繁に果たされるのです。25:12 それでも、ローマ人より前に、神のご配剤によって、長く王国を保った人々がいました。アッシリア人、メディア人、ペルシャ人、さらにギリシア人とエジプト人です。しかも、彼らには、神祇官も、アルウァレスの兄弟団も、サリイも、ウェスタの乙女たちも、鳥占い官もいませんでした。籠に閉じ込めたひな鳥もいませんでした。そのひな鳥が餌を食べるか食べ渋るかで、国の最も重大な事が導かれるのです。

# 26〜28章　オクタウィウスの演説（五）

26:1 実際、ここで、あのローマの鳥の兆しと鳥占いに話を移します。あなたは、それを大変な苦労をして集め、証言しました。怠って悔やまれたものと、守って幸いを得たものとしてです。26:2 クラウディウスとフラミニウスとユニウスは、軍勢を失いました。もちろん、それは、ひな鳥の最もめでたい兆しを待つべきだと思わなかったからなのでしょう。ひな鳥が、こぼすほどに餌をついばむ兆しです。26:3 レグルスはどうでしょうか。鳥占いを守ったのに、それでも捕らえられたではありませんか。マンキヌスは宗教を固く守りましたが、それでも軛の下をくぐらされ、敵に引き渡されました。パウルスも、よく食べるひな鳥を得ていました。それでも、カンナエで、ローマの国の人々の大部分とともに打ち倒されたのです。26:4 ガイウス・カエサルは、冬至より前に船をアフリカへ渡してはならないと、鳥占いと鳥の兆しが逆らったのに、それを軽んじました。そのため、かえってたやすく航海し、勝利したのです。26:5 では、神託について、どんなことを、どれほど語りましょうか。アンピアラオスは、死んだ後で、これから起こることを答えました。それなのに、自分が首飾りのために妻に裏切られることは、知りませんでした。テイレシアスは、目が見えないのに未来を見ていました。それなのに、目の前のことは見ていなかったのです。26:6 エンニウスは、ピュロスについてのピュトのアポロの答えを、でっち上げました。アポロは、そのときにはもう詩句で答えるのをやめていたのにです。アポロの、あの用心深い、どちらにも取れる神託がすたれたのは、人々がより洗練され、あまり信じやすくなくなったときでした。また、デモステネスは、答えが偽りであることを知っていました。そのため、巫女ピュティアがフィリッポスの味方をしていると不平を言ったのです。26:7 「それでも、鳥の兆しや神託が、ときには真理に触れたこともあるではないか」と、あなたは言うでしょう。もっとも、多くの嘘の中では、偶然が意図をまねたように見えることもあるでしょう。それでも、わたしは、誤りとゆがみの源そのものに取りかかります。この闇はすべて、そこから流れ出たのです。その源を、もっと深く掘り起こし、もっとはっきりと明るみに出しましょう。純粋でない、さまよう霊たちがいます。地上の朽ちることと欲望とに重くされ、天の活力から落ちた霊たちです。26:8 それで、この霊たちは、悪徳を負い、悪徳に沈んで、自分の本質の純一さを失いました。そののち、自分の災いの慰めのために、やむことなく働きます。自分がもう滅びたので、人を滅ぼします。自分がゆがめられたので、ゆがみの誤りを注ぎ込みます。自分が神から離されたので、ゆがんだ宗教を持ち込んで、人を神から引き離すのです。26:9 この霊たちがダイモンであることを、詩人たちは知っており、哲学者たちは論じています。ソクラテスも、それをよく知っていました。ソクラテスは、自分にいつも付き添うダイモンのうなずきと意向に従って、事を退けたり、求めたりしていたからです。26:10 魔術師たちも、ダイモンを知っているだけではありません。何であれ不思議なわざを戯れに演じるときは、ダイモンを通して行っています。ダイモンが息を吹きかけ、注ぎ込むことで、魔術師たちは目くらましを見せるのです。ないものが見えたり、あるものが見えなかったりするようにします。26:11 その魔術師たちの中で、言葉でもわざでも第一の者であるホスタネスは、まことの神を、ふさわしい威厳をもってたたえています。また、天使たちのことも知っています。天使たちとは、神の、それもまことの神の、仕える者と使いたちです。天使たちは、神をあがめるためにそばに立っています。そして、主のうなずき一つ、御顔の動き一つにもおびえ、震え上がるほどだというのです。同じホスタネスは、ダイモンが地上のもので、さまよい、人類の敵であることも明かしました。26:12 プラトンはどうでしょうか。神を見いだすことは骨の折れることだと考えたプラトンも、天使とダイモンについては、造作もなく語っているではありませんか。また、自分の『饗宴』の中でも、ダイモンの本性を描き出そうと努めているではありませんか。実際、プラトンは、ダイモンが、死ぬものと死なないもののあいだ、つまり体と霊のあいだにある中間の本質だとします。地上の重さと

天の軽さが混じり合って固まったものだというのです。そして、この本質から、愛の欲求もわたしたちの中に生まれると教えます[1]。プラトンは言います。愛の欲求は、人間の胸の中で形をとり、そこに忍び込み、感覚を動かし、情を作り上げ、欲望の熱を注ぎ込む、と。

27:1 それで、この汚れた霊たちは、ダイモンです。魔術師たちによって、哲学者たちによって、プラトンによって示されたとおりです。ダイモンは、神として祀られた立像や肖像の下に潜んでいます。そして、自分の息吹によって、まるで神的な力がそこにいるかのような権威を得ます。あるときは予言者たちに霊感を吹き込み、社にとどまります。ときにはいけにえの内臓の筋を動かし、鳥の飛び方を操り、くじを導き、神託を生み出します。その神託は、真実より多くの偽りに包まれています。27:2 実際、ダイモンは欺かれ、また欺きます。純粋な真理を知らないうえに、知っている真理も、自分の滅びになるので告白しないからです。こうしてダイモンは、人を天から下へと引きずり下ろし、まことの神から物質へと呼び離します。生活をかき乱し、眠りを騒がせます。また、薄い霊なので、ひそかに体に忍び込み、病を作り上げ、知性をおびえさせ、手足をねじ曲げます。それは、人を、自分を拝むように追い込むためです。そして、祭壇の煙やいけにえの家畜で肥え太ると、自分で締めつけていたものを緩めて、治したように見せるためです。27:3 狂う者たちが出てくるのも、ここからです。あなたがたは、彼らが人前に走り出るのを見ています。彼らもまた、神殿を持たない予言者で、このように正気を失い、このように熱狂し、このようにぐるぐる回ります。彼らの中にも、ダイモンのそそのかしは同じようにあります。ただ、狂いの中身が違うのです。27:4 少し前にあなたが語ったことも、ダイモンの仕業です。ユピテルが夢によって競技のやり直しを求めたこと、騎士の兄弟が馬とともに姿を見せたことです。また、ある婦人の帯に小舟がついていったことです。27:5 ダイモン自身が、これらのことをみな、自分について告白しています。わたしたちが、言葉の責め苦と祈りの火で、ダイモンを体から追い出すたびにです。あなたがたの大部分も、それを知っています。27:6 サトゥルヌスその人も、セラピスも、ユピテルも、あなたがたの拝むダイモンは何であれ、そうです。痛みに負けて、自分が何者であるかを口に出すのです。自分の恥になる嘘を、つくはずがありません。とりわけ、あなたがたの何人かが、そばに立ち会っているときにはです。27:7 彼らがダイモンであることについては、彼ら自身を証人として、白状した当人たちを信じてください。実際、まことの唯一の神にかけて命じられると、彼らは、あわれな体の中で、いやいやながら身震いします。そして、すぐに飛び出すか、少しずつ消えていきます。とりつかれた人の信仰が助けるか、癒やしてくださる方の恵みが息を吹きかけるかによるのです。こうして彼らは、近くではキリスト者から逃げ回ります。遠くからは、人々の集まりの中で、あなたがたを使ってキリスト者を攻め立てていたのにです。27:8 そのために、ダイモンは、無知な者たちの知性に入り込み、恐れを通して、わたしたちへの憎しみをひそかに蒔きます。恐れる相手を憎み、怖がる相手をできることなら苦しめるのは、自然なことだからです。このようにダイモンは、魂を占め、胸をふさぎます。そのため人々は、わたしたちをよく知るより先に、憎み始めるのです。知ったうえで、わたしたちをまねることができるようになったり、罪に定めることができなくなったりしないためです。

28:1 よく知らず、調べもしないことについて裁くのが、どれほど不当であるか。あなたがたはそうしていますが、悔いているわたしたち自身の言うことを信じてください。28:2 わたしたちも、かつては同じことをしていたからです。まだ目が見えず、鈍かったころ、あなたがたと同じように考えていました。キリスト者は奇怪なものを拝み、赤子をむさぼり食い、近親姦の宴を催している、と。わたしたちは、気づいていませんでした。その作り話は、いつもダイモンにあおり立てられるだけで、一度も調べられることも、明らかにされることもなかったのです。また、これほど長いあいだ、密告する者が一人も現れませんでした。密告すれば、自分のしたことの赦しばかりか、密告の褒美まで得られたはずなのにです。それに、悪いことなど何もなかったので、訴えられたキリスト者は、恥じもせず、恐れもしませんでした。ただ一つ、もっと早くキリスト者にならなかったことだけを、悔いていたのです。28:3 それでもわたしたちは、神聖を汚す者や近親姦の者、身内殺しの者でさえ、弁護し守るために引き受けていました。それなのに、キリスト者のことは、聞く必要さえまったくないと考えていました。ときには、彼らをあわれむあまり、かえって残酷に荒れ狂いました。告白する者を拷

問にかけて、否ませようとしたのです。言うまでもなく、死なせないためにです。わたしたちは、彼らにあべこべの取り調べを行いました。真実を掘り起こすためではなく、嘘を強いるための取り調べです。28:4 そして、だれか弱い者が、苦しみに押しつぶされ、負けて、自分はキリスト者ではないと否むことがありました。すると、わたしたちはその者をかばいました。まるで、キリスト者という名を捨て、そう否んだことで、自分のしたことをすべてもう清めたかのようにです。28:5 わたしたちが、あなたがたの今考え、行っているのと同じことを、考え、行っていたことが分かるでしょうか。しかも、もし、ダイモンのそそのかしではなく理性が裁くのなら、キリスト者には、むしろ迫るべきでしょう。自分がキリスト者であることを打ち消すように迫るのではありません。近親姦の淫らな交わりや、不敬な祭儀や、いけにえにされた赤子について、白状するように迫るべきなのです。28:6 実際、同じダイモンが、こうした作り話や、これに類する作り話を使っていたのです。そうして、無知な者たちの耳を満たし、わたしたちに逆らわせていました。わたしたちを呪わしいものとして、おぞましく思わせるためでした。それでも、驚くことではありません。噂は、いつもまき散らされた嘘で養われ、真理が示されると消え失せるからです。28:7 これが、ダイモンのやり方です。偽りの風評は、ダイモン自身によって蒔かれ、育てられるからです。わたしたちにとって、ろばの頭が神聖なものだと聞いたと、あなたが言うのも、そこから来ています。それを拝むほど愚かな者がいるでしょうか。それが拝まれていると信じるほど、さらに愚かな者がいるでしょうか。ただ、あなたがたのほうは、ろばを丸ごと、厩で神として祀っています。あなたがたの、いやむしろ、ろばたち自身のエポナとともにです。また、同じろばを、イシスとともに、うやうやしく飾っています。同様に、牛の頭や去勢した羊の頭を、いけにえにもし、拝みもしています。山羊と人の混じった神々や、獅子や犬の顔をした神々も、奉献しています。28:8 あなたがたは、エジプト人とともに、雄牛アピスを拝み、しかも飼って養っているではありませんか。エジプト人の祭儀を、罪に定めもしません。それは、蛇や鰐や、そのほかの獣や、鳥や魚のために定められた祭儀です。そのどれか一匹の神を殺した者は、死罪にさえ処せられるのです。28:9 同じエジプト人は、あなたがたの大部分とともに、イシスを、玉ねぎの辛さ以上には怖がりません。セラピスにも、体の恥ずかしい所から押し出される音以上には、震え上がりません。28:10 祭司の陰部を拝んでいると、わたしたちに逆らって作り話をする者もいます。その者も、自分たちのことを、わたしたちに押しつけようとしているのです。実際、そうしたことは、もしかすると、彼らの恥知らずの祭儀なのかもしれません。彼らのもとでは、どちらの性の者も、体のあらゆる部分で身を売ります。彼らのもとでは、どんな恥知らずも都会風の才気と呼ばれます。彼らは娼婦の放縦をうらやみ、男の股をなめ、淫らな口で下腹に吸いつきます。たとえ黙っていても、舌の汚れた者たちです。彼らは、自分の恥知らずを恥じるより先に、それに飽きてしまうのです。28:11 ああ、罰当たりな！　彼らは、それほどの悪い罪を、自分の身に許しています。どれほど柔らかな年頃の者でも耐えられず、どれほど厳しい奴隷の身でも強いられないほどの罪です。

## 訳注

1 この句は写本が崩れていて、読み方が定まらない。

# 29〜32章　オクタウィウスの演説（六）

29:1 こうした恥ずべきことや、これに類することは、わたしたちには聞くことさえ許されません。言葉を多く費やして弁明することさえ、恥ずかしいのです。あなたがたは、清く慎み深い者たちについて、そうしたことを作り上げているからです。あなたがたが自分たちの身で明らかにしているのでなければ、そんなことが起こりうるとは、わたしたちは信じないでしょう。29:2 実際、あなたがたは、犯した罪のために極刑を受けた男とその十字架を、わたしたちの宗教に帰しています。その点で、あなたがたは真理のそばから遠く迷い出ています。罪人が神と信じられるに値したとか、地上の者が神と信じられえたとか、あなたがたは考えているのです。29:3 死ぬべき人間に望みのすべてをかける者は、まことに、あわれむべき者です。その者の助けはすべて、その人間が死ぬとともに終わるからです。29:4 確かに、エジプト人は、自分たちの拝む人間を選びます。その一人をなだめ、その一人にすべてを伺い、その一人に犠牲を屠ります。しかし、その者は、ほかの者には神であっても、自分にとってはまぎれもなく人間です。望もうと望むまいとです。他人の自覚を欺いても、自分の自覚は欺かないからです。29:5 君主たちや王たちにも、偽りのへつらいが、恥ずかしげもなく取り入ります。それも、偉大で選ばれた人々として扱うのが当然なのに、そうではなく、神々としてです。すぐれた人には敬意を捧げるほうが真実であり、最もよい人には愛を捧げるほうが甘いのにです。このように彼らは、君主たちの神的な力を呼び求め、その肖像に祈り、そのゲニウス、つまり君主たちのダイモンに嘆願します。そして彼らには、王のゲニウスにかけて偽って誓うより、ユピテルのゲニウスにかけて偽って誓うほうが安全なのです。29:6 十字架も、わたしたちは拝みもせず、望みもしません。はっきり言えば、あなたがたは木の神々を神として祀っています。そのあなたがたこそ、木の十字架を、自分たちの神々の一部として、ひょっとすると拝んでいるのでしょう。29:7 実際、軍旗そのものも、旗も、陣営の旗も、金を塗って飾り立てた十字架でなくて何でしょうか。あなたがたの勝ち誇った戦勝記念碑も、ただの十字架の形だけでなく、はりつけられた人の形までまねています。29:8 確かに、わたしたちは、十字架のしるしを、自然のままに船の中に見ています。船が帆をふくらませて進むときにも、櫂を広げて滑っていくときにもです。軛が立てられるときも、十字架のしるしです。人が両手を差し伸べ、清い心で神をあがめるときもそうです。このように、十字架のしるしの上に、自然の理が立っているか、あなたがたの宗教が形づくられているかです。

30:1 ここで、わたしたちが赤子を殺し、その血で手ほどきを受けると言う者、あるいは信じる者に、ぜひ会ってみたいものです。あなたは、そんなことが起こりうると思うのですか。これほど柔らかく、これほど小さな体が、死をもたらす傷を受けるなどということがです。生まれたばかりの、まだ人間ともいえない者の、あの初々しい血を、だれかが切り裂いて流し、飲み干すなどということがです。それをあえて行える者でなければ、だれもこれを信じることはできません。30:2 実際、わたしは見ています。あなたがたは、生んだ子を、ある子は獣や鳥に捨て、ある子は首を絞めて、みじめな死に方で殺しています。また、薬を飲んで、生まれてくるはずの人間のもとを自分の胎の中で消し去り、産む前に身内殺しをする女たちもいます。30:3 そして、こうしたことは、間違いなく、あなたがの神々の教えから出ています。実際、サトゥルヌスは、自分の子供たちを捨てはしませんでした。呑み込んだのです。当然、そのサトゥルヌスに、アフリカのいくつかの地方では、親たちによって赤子がいけにえにされていました。親たちは、あやしたり口づけをしたりして、泣き声を押し殺しました。いけにえが、泣きながらいけにえにされることのないためです。30:4 ポントスのタウリ人や、エジプトのブシリスにも、客人をいけにえにする儀礼がありました。ガリア人にも、メルクリウスに、人間の、いや、人でなしの犠牲を屠る儀礼がありました。ローマ人にも、ギリシア人の男と女、ガリア人の男と女を、供え物として、生きたまま埋める儀礼がありました。今日でも、ローマ人自身によって、ラティアリ

スのユピテルが人殺しで拝まれています。そして、サトゥルヌスの子にふさわしく、悪く罪ある人間の血で肥やされているのです。30:5 カティリナに、血の誓いで共謀することを教えたのも、きっとこのユピテル自身でしょう。ベッロナに、人の血をすすって自分の祭儀を染めることを教えたのも、そうです。癩癇を人の血で、つまり、もっと重い病で治すことを教えたのもです。30:6 闘技場の獣を食らう者たちも、これと変わりません。その獣は、人の血に塗れて染まり、あるいは人の手足や臓物で肥えているのです。わたしたちには、人殺しは見ることも聞くことも許されません。わたしたちは人の血をそれほど避けていて、食用の家畜の血さえ、食べ物としては知らないほどです。

31:1 また、近親姦の宴についても、ダイモンたちの寄り合いが、わたしたちに逆らって、大きな作り話を偽って言いふらしました。醜い汚名を振りかけて、わたしたちの慎みの誉れを汚すためでした。真理が調べられる前に、口にできない評判の恐ろしさで、人々をわたしたちから遠ざけるためでした。31:2 このように、この件については、あなたと同郷のフロントも、事実を請け合う者として証言したのではありません。弁論家として、悪口を振りかけたのです。こうしたことは、むしろ、あなたがたの民から生まれたものだからです。31:3 ペルシャ人のもとでは、母と交わることが許されています。エジプト人やアテナイ人のもとでは、姉妹との結婚が正式なものとされています。あなたがたの歴史や悲劇は、近親姦を誇っています。あなたがたはそれを、喜んで読み、また聞いています。このように、あなたがたは、近親姦の神々をも拝んでいます。母と、娘と、姉妹と交わった神々です。31:4 それゆえ、近親姦が、あなたがたのもとでしばしば見つかり、いつも犯されているのも当然です。みじめな人たちよ、あなたがたは、知らないうちでさえ、許されないことに陥りかねません。あなたがたは、愛欲をだれかれなくまき散らし、至る所で子をもうけています。家で生まれた子でさえ、たびたび他人のあわれみに捨てています。そうしている以上、自分の身内に行き当たり、自分の子供たちのもとへ迷い込むことは避けられません。こうして、あなたがたは、それと気づかないときでさえ、近親姦の筋書きを、自分の身で織りなしているのです。31:5 しかし、わたしたちは、慎みを、顔ではなく心で示しています。ただ一つの結婚の絆に、喜んでとどまります。子をもうける欲望は、ただ一人の妻に向けるか、まったく持たないかです。わたしたちの宴は、慎み深いだけでなく、しらふでもあります。ごちそうにふけることも、宴を酒で長引かせることもしないからです。そうではなく、陽気さを、重々しさで和らげるのです。多くの者は、言葉は清く、体はなおさら清く、汚されない体の終生の純潔を、誇るより、むしろ味わっています。要するに、近親姦の欲求はわたしたちから遠く離れていて、ある者たちには、慎みある交わりでさえ恥ずかしいほどです。31:6 わたしたちは、あなたがたの栄誉や紫の衣を辞退するからといって、どん底の庶民から出ているわけではありません。皆が一つの善を思い、集まっても一人のときと同じ静けさを保つからといって、徒党を組んでいるわけでもありません。あなたがたが、わたしたちの言うことを公然と聞くのを恥じるか恐れるからといって、隅で口数が多いわけでもありません。31:7 また、わたしたちの数が日ごとに増えていることは、誤りの罪状ではなく、称賛の証言です。美しい生き方の中では、自分たちの者はとどまって堅く続け、よその者は加わって増えていくからです。31:8 要するに、このようにわたしたちは、体の目印によって互いを見分けるのではありません。あなたがたはそう思っていますが、潔白と慎みのしるしによって、たやすく見分けるのです。このようにわたしたちは、あなたがたが嘆くとおり、互いの愛で愛し合っています。憎むことを知らないからです。このようにわたしたちは、あなたがたがねたむとおり、互いを兄弟と呼びます。ただ一人の神を親とする人間として、信仰を分かち合う者として、希望を共に受け継ぐ者としてです。実際、あなたがたは、互いを認め合わず、互いの憎しみに荒れ狂っています。兄弟と認め合うのは、確かに、身内殺しのためだけです。

32:1 では、聖所や祭壇を持たないからといって、わたしたちが拝むものを覆い隠していると、あなたがたは思うのですか。実際、どんな像を、わたしが神のために作り上げるというのでしょうか。正しく考えるなら、人間こそが神の像なのにです。どんな神殿を、その方のために建てるというのでしょうか。その方のわざによって造られたこの世界全体でさえ、その方を収めきれないのにです。人間にすぎないわたしでさえ、もっと広いところに住んでいます。それなのに、これほどの威厳の力を、一つの小さな祠の中に閉じ込めるというのでしょうか。32:2 その方は、わたしたちの心の中でこそ、よりふさわしく奉献されるべきではあり

ませんか。いや、わたしたちの胸の中でこそ、祀られるべきではありませんか。わたしの用のために神が生み出してくださったいけにえや犠牲を、わたしは神に捧げるというのでしょうか。神ご自身の恵みを、神に投げ返すためにでしょうか。それは恩知らずなことです。善い魂と、清い心と、誠実な良心こそが、神に受け入れられるいけにえなのですから。32:3 それゆえ、潔白を守り行う者は、神に祈っているのです。正義を守り行う者は、神に献酒しています。欺きを断つ者は、神をなだめています。人を危険から救い出す者は、肥えた犠牲を屠っています。これがわたしたちの供え物であり、これが神への祭儀です。このように、わたしたちのもとでは、より正しい者が、より信心深いのです。32:4「しかし、君たちは、自分の拝む神を、示しもしなければ、見もしないではないか」と、あなたは言うでしょう。いや、わたしたちは、神を感じとることはできても、見ることはできません。まさにこのことから、神を信じているのです。実際、わたしたちは、神のわざの中にも、世界のあらゆる動きの中にも、神の御力がいつもそこにあるのを見ています。雷鳴がとどろき、稲妻が光り、雷が落ちるときにも、空が晴れるときにもです。32:5 あなたが神を見ないからといって、驚くことはありません。風やそのひと吹きによって、すべてのものは押され、揺さぶられ、かき回されます。それでも、風もそのひと吹きも、目には見えません。太陽は、すべてのものに見ることを得させるものなのに、わたしたちはその太陽でさえ見ることができません。光線で視力は退けられ、見つめる者のまなざしは鈍り、長く見つめれば、視覚はすべて消えてしまいます。32:6 では、どうでしょうか。太陽の造り手であり、光の源であるその方そのものに、あなたは耐えられるでしょうか。その方の稲妻からは身をそむけ、雷からは身を隠すのにです。あなたは、それによって生かされ、話している自分の霊魂さえ、見ることも、つかむこともできません。それでも、肉の目で神を見たいというのですか。32:7「しかし、神は人間の行いを知らない。天に据えられていて、すべての人を巡り歩くことも、一人一人を知ることもできない」と、あなたは言うでしょう。人よ、あなたは迷い、欺かれています。実際、神がどこから遠くにおられるというのでしょうか。天のものも地のものも、この世界という領分の外にあるものも、すべてが神に満ちているのにです。神は至る所で、わたしたちのすぐ近くにおられるだけではありません。わたしたちの中に注ぎ込まれておられるのです。32:8 もう一度、太陽に目を向けてごらんなさい。太陽は天に留められていながら、地のすべてに広がっています。至る所に等しくそこにあり、すべてのもののあいだにあって、混じり合っています。それでも、その輝きは、どこでも汚されることがありません。32:9 まして、神は、どれほどそうでしょうか。神はすべてのものの造り主で、すべてを見張る方です。その方には、何一つ隠れたものはありえません。その方は、闇の中にもおられます。わたしたちの思いの中にも、それがもう一つの闇であるかのように、おられるのです。わたしたちは、その方のもとで行動するだけでなく、言ってよければ、その方とともに生きているのです。

# 33〜36章　オクタウィウスの演説（七）

33:1 また、わたしたちは、自分たちの数の多さにうぬぼれてはなりません。わたしたちは、自分では多いように見えても、神の前ではごくわずかなのです。わたしたちは、民と民族とを区別します。しかし、神にとっては、この世界全体が一つの家です。王たちは、自分の王国の様子を、臣下たちのさまざまな務めを通して知ります。神は、知らせを必要とされません。わたしたちは、神の目の前に生きているだけでなく、神のふところの中に生きているからです。33:2「しかし、ユダヤ人には、何の役にも立たなかったではないか。彼らも、唯一の神を、祭壇と神殿によって、この上ない迷信をもって拝んだのに」と、あなたは言うでしょう。それは、ものを知らないことからくる思い違いです。あなたは、前のことを忘れたか、知らないまま、後のことだけを思い起こしているのです。33:3というのも、彼らも、わたしたちの神を身をもって知ったからです。同じ方が、すべての者の神だからです。実際、彼らが神を清く、罪なく、うやうやしく拝み、救いとなる戒めに従っていたあいだのことです。彼らは、わずかな者から数えきれない者となり、乏しい者から富む者となり、仕える者から王となりました。少ない者が多い者を、武器のない者が武器を持つ者を、逃げながら、追ってくる者たちを打ち倒しました。神が命じられ、元素も力を貸したのです。33:4彼ら自身の書物を読み返してごらんなさい。あるいは、ローマ人の書いたもののほうがよければ、昔の書き手は素通りしましょう。アントニウス・ユリアヌス[1]の、ユダヤ人についての書を調べてごらんなさい。そうすれば、すぐに分かるでしょう。彼らは、自分たちの悪によって、この運を得たのです。彼らの身に起こったことはみな、頑なさに留まり続けるならそうなると、前もって告げられていたのです。33:5このように、あなたは知るでしょう。彼らは、見捨てられるより先に、自分たちが見捨てたのです。また、あなたが不敬にも言うように、自分たちの神もろとも捕虜になったのではありません。神が、彼らを、教えから逃げた脱走兵として引き渡されたのです。

34:1 さて、世界の炎上について言えば、思いがけず火が落ちてくることも、世界が崩れ落ちること[2]も信じないのは、世間の誤りです。34:2実際、知者たちのうちのだれが疑うでしょうか。だれが知らないでしょうか。生まれたものはすべて死に、造られたものはすべて滅びるということをです。天もまた、天に含まれるすべてのものとともに、始まりがあったように、火の力に移っていきます。泉の甘い水が、海を養うことをやめるときです。これがストア派の変わらない説です。湿りが尽きて、この世界全体が火になるからです。34:3エピクロス派の人々にも、元素の大火と世界の崩壊について、まったく同じ考えがあります。34:4同じように、プラトンも語っています。世界の部分は、あるときは水にあふれ、あるときは代わる代わる燃え上がる、と言うのです。また、プラトンは、世界そのものは永続し、解かれないものとして造られたと言いながら、こう付け加えました。ただ、その造り手である神にとってだけは、解かれうるもの、死ぬものである、と。34:5このように、この巨大な塊が、それを組み立てられた方によって壊されても、何の不思議もありません。あなたも気づくでしょう。哲学者たちは、わたしたちの言うことと同じことを論じています。わたしたちが彼らの足跡をたどったからではありません。彼らが、預言者たちの神的な予言から、ゆがめられた真理の影をまねたからです。34:6このようにまた、生まれ変わることの定めも、知者たちの中でも名の通った者たちが伝えました。まずピュタゴラス、そしてだれよりもプラトンです。ただし、損なわれ、半分に欠けた形で伝えたのです。実際、彼らは、体が解けたあと、魂だけがいつまでも残り、何度も別の新しい体に移り住む、と言うのです。34:7さらに彼らは、真理をねじ曲げるために、あのことまで付け加えます。人間の魂が、家畜に、鳥に、獣に戻っていく、と言うのです。これは確かに、哲学者の探究ではなく、道化芝居のあざけりにふさわしい考えです。34:8しかし、この点でも、あなたがたの知者たちは、ある程度わたしたちと声を合わせています。わたしたちの論には、それで十分です。34:9さ

て、人間は、初めに神によって形づくられることができたように、もう一度作り直されることもできます。これにあえて逆らうほど、愚かで物分かりの悪い者がいるでしょうか。人は、死んだあと無であるように、生まれる前も無であったのではありませんか。それなら、無から生まれることができたように、無から元どおりにされることもできるのではありませんか。しかも、ないものを始めるほうが、あったものをくり返すより難しいのです。34:10わたしたちの鈍い目から何かが消えると、それは神にとっても滅びたと、あなたは思うのですか。体はみな、乾いて塵になっても、湿りに溶けても、灰に押し固められても、煙に薄まっても、わたしたちからは取り去られます。しかし、元素の番人である神のもとには、取っておかれるのです。また、わたしたちは、あなたがたが思っているように、火で葬られて何かの損を受けることを恐れているのではありません。土に葬るという、より古く、よりよい習わしを守っているのです。34:11ごらんなさい。自然全体が、わたしたちの慰めのために、どれほど来たるべきよみがえりの下稽古をしていることでしょう。太陽は沈んで、また生まれます。星々は傾いて、また戻ってきます。花は散って、また生き返ります。木々は老いたあとに、葉を茂らせます。種は、朽ちてこそ、また芽吹きます。墓の中の体[3]は、冬の木と同じです。偽りの枯れの下に、緑を隠しているのです。34:12まだ冬が厳しいうちに、なぜ体が生き返って戻ってくることを急ぐのですか。わたしたちは、体の春も待たなければなりません。わたしは知らないわけではありません。多くの者は、自分の行いが何に値するかを自覚しています。そのため、死んだあと自分が無になることを、信じているというより、願っているのです。罰を受けるために元どおりにされるより、すっかり消えてしまうほうを望むからです。彼らの誤りは、この世で自由が許されていることで、ますます大きくなります。神がこの上なく忍耐しておられることでも、大きくなるのです。神の裁きは、遅ければ遅いほど、いっそう正しいのです。

35:1とはいえ、人々は、最も学のある人々の書物と詩人たちの歌によって、警告を受けています。あの火の川と、ステュクスの沼から出て幾重にも巡る炎熱についてです。学者と詩人たちは、それが永遠の苦しみのために備えられていると知って、伝えたのです。ダイモンたちの知らせと、預言者たちの神託から知ったのです。35:2そのため、彼らの語るところでは、王ユピテル自身でさえ、燃えたぎる岸と黒い淵にかけて、うやうやしく誓います。自分を拝む者たちとともに自分に定められている刑罰を、前もって知っていて、戦慄しているからです。35:3その責め苦には、限りも終わりもありません。そこでは、知恵ある火が、手足を焼いては新たにし、食いちぎっては養います。雷の火は、体に触れても焼き尽くしません。エトナ山やウェスウィウス山の火、至る所の燃える土地の火は、燃えさかっても尽きません。同じように、あの刑罰の炎は、焼かれる者が損なわれていくのを糧とするのではありません。食い尽くされることのない体を引き裂くことで、養われるのです。35:4神を知らない者たちが、不敬な者として、不正な者として、責めさいなまれるのは当然です。不信心な者のほかは、だれもこのことを疑いません。すべてのものの親であり、すべてのものの主人である方を知らないことは、傷つけることに劣らない悪事だからです。35:5神についての無知は、刑罰を受けるのに足ります。同じように、神を知ることは赦しに役立ちます。それでも、わたしたちキリスト者をあなたがたと比べるなら、わたしたちのほうがはるかにすぐれていると分かるでしょう。わたしたちの中には、教えを守りきれない者がいるとしてもです。35:6実際、あなたがたは、姦淫を禁じながら、それを行っています。わたしたちは、自分の妻に対してだけ、男として生まれています。あなたがたは、犯された悪事を罰します。わたしたちのもとでは、思うことさえ罪を犯すことです。あなたがたは、事情を知る者を恐れます。わたしたちは、良心だけでも恐れます。それなしには生きられない良心です。要するに、牢獄はあなたがたの仲間であふれかえっています。そこにキリスト者は一人もいません。いるとすれば、自分の宗教のゆえに訴えられた者か、信仰を捨てて逃げた者だけです。

36:1また、だれも、運命を持ち出して慰めを求めたり、成り行きの言い訳にしたりしてはなりません。巡り合わせは運のものだとしても、心は自由です。そのため、裁かれるのは人の行いであって、身分ではありません。36:2実際、運命（ファトゥム）とは、神がわたしたち一人一人について語られた（ファトゥス）ことでなくて何でしょうか。神は、その人の素地をあらかじめ知ることがおできになるので、一人一人の値打ちと性質に応じて、運命をも定められるのです。こ

のように、わたしたちの中で罰せられるのは、生まれたときの星の配置ではありません。その人の気質の本性が罰せられるのです。運命については、時が限られていて短くはあっても、これで十分としましょう。別の機会に、もっと豊かに、もっと詳しく論じるつもりです。36:3 さて、わたしたちの大部分が貧しいと言われることについては、それはわたしたちの恥ではなく、誉れです。魂は、ぜいたくでゆるむように、つましさで引き締まるからです。36:4 とはいえ、乏しさを覚えず、他人のものを欲しがらず、神に対して富んでいる者が、どうして貧しくありえるでしょうか。多く持ちながら、もっと多くを欲しがる者のほうが、よほど貧しいのです。36:5 それでも、わたしの思うところを言いましょう。だれも、生まれたときほど貧しくはなれません。鳥は、蓄えもなしに生き、その日その日に養われています。しかし、鳥はわたしたちのために生まれたのです。それらはみな、欲しがらなければ、わたしたちのものです。36:6 それゆえ、道を行く者は、身軽に進むほど幸せです。同じように、生きるというこの旅路でも、貧しさで身を軽くし、富の重荷の下であえがない者のほうが、幸いです。36:7 とはいえ、もし財産が役に立つと思うなら、わたしたちは神に求めるでしょう。すべてを持っておられる方なら、きっといくらかは恵むことがおできになるでしょう。しかし、わたしたちは、富を手にするより、ないがしろにするほうを選びます。潔白をいっそう望み、忍耐をいっそう求めます。浪費する者であるより、善い者であるほうを選びます。36:8 また、わたしたちが、体に人間として伴う患いを感じ、耐えていることは、刑罰ではなく、兵役です。強さは、弱さの中で培われ、災いはしばしば徳の教えとなるからです。さらには、心の力も体の力も、労苦で鍛えなければ、鈍ってしまいます。あなたがたが手本として掲げる勇士たちも、まさにみな、自分の苦難によって名を輝かせ、栄えたのです。36:9 ですから、わたしたちについても、神は、助けることができないのでも、見下しておられるのでもありません。神は、すべてのものを導く方であり、ご自分の者たちを愛する方だからです。そうではなく、逆境の中で一人一人を探り、調べておられるのです。危険の中で一人一人の気質を量り、最後の死に至るまで、人の意志を尋ねられます。ご自分には何一つ失われえないと、確信しておられるからです。ですから、金が火で試されるように、わたしたちも危難で試されるのです。

## 訳注

1 写本にはヨセフスの名もあるが、後の書き込みとみて訳さない。
2 この句は写本が崩れていて、読み方が定まらない。
3 写本では『墓の中で』でなく『この世で』とある。

# 37〜40章　オクタウィウスの演説（八）と結び

37:1 キリスト者が痛みと渡り合うとき、脅しと罰と責め苦に立ち向かわされるとき、それは神にとって、なんと美しい見世物でしょう。死の物音と刑吏の恐ろしさをあざ笑って踏みつけるときも、そうです。王たちや君主たちに向かって自分の自由を掲げ、自分がその方のものである神にだけ屈するときも、そうです。勝った者として、凱旋将軍として、自分に判決を下した当の者をあざけるときも、そうです。争って求めたものを手に入れた者が、勝ったのだからです。37:2 総大将の目の前で、いっそう大胆に危険に挑まない兵士が、いるでしょうか。試されないうちに褒美を受け取る者は、だれもいないからです。とはいえ、総大将は、自分の持っていないものは与えられません。いのちを延ばすことはできず、兵役に誉れを与えることができるだけです。37:3 しかし、神の兵士は、痛みの中で見捨てられることもなく、死で終わることもありません。このように、キリスト者は、みじめに見えることはあっても、みじめな者として見いだされることはありえません。あなたがた自身も、災いに遭った人々を天までほめ上げています。ムキウス・スカエウォラがそうです。この人は、王を討ちそこなったとき、もし右手を失わなかったら、敵の中で死んでいたはずです。37:4 そして、わたしたちの仲間では、どれほど多くの者が、少しも泣き叫ばずに耐え抜いたことでしょう。右手だけでなく、体全体が焼かれ、焼き尽くされるのをです。しかも、放免されることが、自分の思いのままにできたのにです。37:5 わたしは、男たちを、ムキウスやアクィリウスやレグルスと比べたりするでしょうか。わたしたちの子供たちや、か弱い女たちは、十字架も責め苦も、獣も、罰のあらゆる脅かしも、もてあそんでいます。吹き込まれた、痛みに耐える忍耐によってです。37:6 ああ、みじめな人たち、あなたがたには分からないのですか。理由もなしに刑罰を受けようと望む者も、神なしに責め苦に耐えられる者も、一人もいないということがです。37:7 ただし、あなたがたが欺かれているというのなら、話は別です。神を知らない者たちが、富にあふれ、誉れに栄え、権能をふるっていることにです。みじめな者たちは、より深く落ちるために、より高く上げられるのです。実際、この者たちは、犠牲のように罰に向けて肥やされ、いけにえのように刑罰に向けて花冠をかぶせられます。まさにそのために、ある者たちは支配と権勢へと押し上げられるのです。堕落した知性の者たちが、権能をほしいままにして、その人たちの気質を思うままに売り買いするためです。37:8 実際、神を知ることなしに、どんな確かな幸福がありうるでしょうか。神を知らないことは、死なのですから。その幸福は夢に似ていて、つかまれる前に、すり抜けていきます。37:9 あなたは王ですか。しかし、恐れられるのと同じだけ、恐れています。どれほど多くの供に囲まれていても、危険に向かうときには、やはり一人です。あなたは富んでいますか。しかし、運を信じるのはまずいことです。たくさんの旅の糧では、短い人生の旅路は備えられず、かえって重荷を負わされます。37:10 あなたは権標と紫の衣を誇っていますか。紫の衣で輝きながら、心では汚れていること、それは、人のむなしい誤りであり、地位のうつろな飾りです。あなたは家柄が高く、生まれがよいのですか。自分の親をほめるのですか。それでも、わたしたちはみな、同じ巡り合わせのもとに生まれ、ただ徳によってだけ区別されます。37:11 それゆえ、品行と慎みで量られるわたしたちが、あなたがたの悪い楽しみと行列と見世物を断つのは、当然です。わたしたちは、それらがもとは祭儀から出たことを知っていて、その害のある誘いを罪に定めます。というのも、戦車競走で、人々が互いにいがみ合う狂乱に、だれがぞっとせずにいられるでしょうか。剣闘士の試合での、人殺しの訓練に、だれがぞっとせずにいられるでしょうか。37:12 芝居でも、狂気は劣らず、恥ずべきことはもっとはびこっています。実際、ある場面では、道化芝居の役者が、姦通を語って聞かせ、あるいは演じて見せます。ある場面では、骨抜きの役者が、愛を演じながら、それを見る者に打ち込みます。同じ役者が、あなたがたの神々に淫らな交わりや、ため息や、憎しみを着せて、神々を不面目にします。同じ役者が、偽りの悲しみを装い、むなし

い身ぶりとうなずきで、あなたがたの涙を誘います。このようにあなたがたは、本当の人殺しは求め、嘘の人殺しには泣くのです。

38:1 わたしたちが、供え物の残りと、注ぎ分けた杯をないがしろにするのは、恐れの告白ではなく、まことの自由の主張です。というのも、生まれるものはみな、汚されることのない神の恵みとして、どんな仕業によっても損なわれはしません。それでも断つのです。わたしたちが、献酒を受けたダイモンたちに屈していると、あるいは、自分の宗教を恥じていると、だれにも思われないためです。38:2 しかし、わたしたちが春の花を楽しむことを、疑う人がいるでしょうか。わたしたちは、春のばらも、百合も、そのほか花の中で色と香りの心地よいものは何でも摘むのですから。実際、わたしたちは、花をまき散らして、柔らかくほどけたまま用い、編んだ花輪にして首に掛けます。確かに、頭に花冠をかぶせないことは、許してください。わたしたちは、花のよい香りを鼻で吸うのが常で、後頭部や髪で吸い込みはしないのです。38:3 また、わたしたちは死者に花冠をかぶせません。わたしのほうこそ、この点であなたがたに驚きます。あなたがたは、息絶えた者に、感じるなら松明を、感じないなら花冠を、どうして与えるのですか。幸いな者は花を必要とせず、みじめな者は花を喜ばないのにです。38:4 しかし、わたしたちは、生きているのと同じ落ち着きで、葬儀を整えます。しおれてゆく花冠を結びつけることはせず、永遠の花で生き生きとした花冠を、神からいただくのを待ち望んでいます。わたしたちは、穏やかに、慎み深く、わたしたちの神の寛大さに安んじています。そして、神の威厳が今ここにあることを信じて、来たるべき幸福の望みを燃え立たせています。こうしてわたしたちは、幸いな者としてよみがえり、来たるべきものを思い見ることで、今すでに生きているのです。38:5 それなら、アテナイの道化ソクラテスは、勝手にするがよいのです。この人は、最も人を欺くダイモンの証言を誇りにしてはいましたが、何も知らないと告白したのです。アルケシラオスも、カルネアデスも、ピュロンも、アカデメイア派の大勢の人々もみな、思案するがよいのです。シモニデスも、いつまでも日延べを続けるがよいのです。わたしたちは、哲学者たちのしかめた眉をないがしろにします。彼らが、人を堕落させる者、姦通する者、僭主であることを、知っているからです。自分の悪徳を責めることには、いつも弁舌さわやかな者たちだということもです。38:6 知恵を、身なりではなく心で示し、大きなことを語るのではなく生きているわたしたちは、誇りとします。彼らがこの上なく努めて探し求めながら、見いだせなかったものを、わたしたちが手に入れたことをです。38:7 神についての真理が、わたしたちの時代に熟したのなら、なぜわたしたちは恩知らずでいるのでしょうか。なぜ自分のものを、自分に惜しむのでしょうか。わたしたちの善いものを楽しみ、正しいことについての考えを、節度をもって整えましょう。迷信は抑えられ、不敬は償われ、まことの宗教は保たれるべきです。

39:1 オクタウィウスが話し終えたとき、わたしたちは呆然として黙り込み、しばらくのあいだ、顔を彼に向けたままでいた。わたしはと言えば、あまりの感嘆に、我を忘れてしまった。感じるほうが語るよりたやすいことを、彼が、論証と実例と、読んだ書物の権威ある言葉とで飾ってみせたからだ。また、悪意ある者たちを、彼らが身に帯びているその哲学者たちの武器で、はね返したからだ。真理が分かりやすいだけでなく、好ましいものでもあることも、示したからだ。

40:1 それで、わたしがこうしたことを黙って胸の内で思いめぐらしていると、カエキリウスが声を上げた。「わたしは、わがオクタウィウスを心から祝う。だが、わたし自身のことも祝う。判定は待たない。わたしたちは勝ったのだ。しかも、こういうわけだ。厚かましいと思われても、わたしは勝利を自分のものにする。というのも、彼がわたしに勝った者であるのと同じように、わたしは誤りに勝った凱旋将軍だからだ」 40:2 「だから、問いの要について言えば、摂理については白状するし、神については譲る。すでにわたしたちのものとなった一派の純粋さについても、同意する。それでも、今もまだ、いくつかのことが心の底に残っている。真理に逆らうものではなく、完全な手ほどきに必要なものだ。それについては、明日、全体について一致した者として、もっと手早く尋ねよう。もう日が沈みかけているからだ」 40:3 「それならわたしは」とわたしは言った。「わたしたちみなに代わって、なおさら喜ぶ。オクタウィウスが、わたしのためにも勝ってくれたからだ。裁くという、たいへん気の重い役目が、わたしから取り除かれたのだから。とはいえ、わたしは、彼の功を、言葉でほめて報いることはできない。人間の、しかも一人きりの人間の証言は、弱いからだ。彼は、神の

すぐれた恵みを受けている。その神から息を吹き込まれて弁じ、助けをいただいて勝ちを収めたのだ」40:4そのあと、わたしたちは楽しく、晴れやかに別れた。

カエキリウスは信じたことを、オクタウィウスは勝ったことを喜んだ。わたしは、一方が信じ、もう一方が勝ったことを喜んだ。

# オクタウィウス

2026年11月23日版
著者　ミヌキウス・フェリクス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/octavius/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/octavius
全文をラテン語原文（Octavius）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。